

第九號

文明之母第九號目次

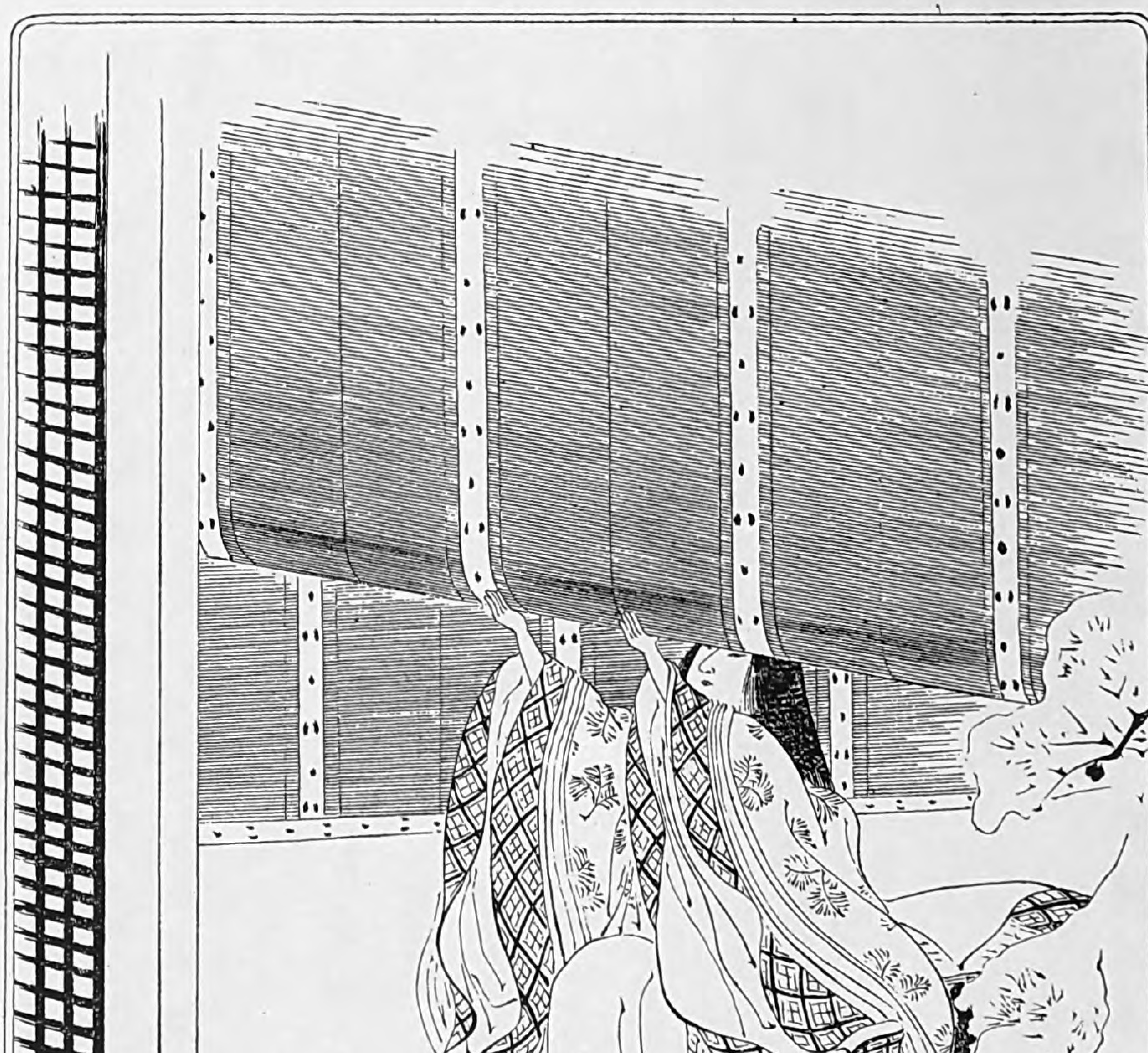
本誌は每月一回（十五日）に發行す
本誌は前金に非れば發送せず
本誌の定價は　（府外は郵税を要す）
一冊　金八錢
六冊半年分　金四十五錢
十二冊壹年分　金八十四錢
（郵税共）　金拾錢　金五十七錢　金壹圓八錢
本誌の廣告料は（五號活字廿字詰）
一行　前金拾錢
廿行以上　前金八錢
十行以上　前金九錢
一頁以上　前金六錢
本誌の見本は郵券拾錢を送らるれば呈す
本誌の代金御回送の節は内國通運早達便又は東京郵便局へ御振込被下度
郵券代用は一割增
本誌の前金將に相切れんとする時は其卷の宿所姓名を朱書して發送せへし然るも尚御回送無之節は直ちに發送を止むへし

版權所有

發行兼編輯人　中村一　東京深川區清町十三番地
印刷人　小西石造　東京深川區仲町八番地
發行所　東京日本橋區大傳馬町二丁目弐拾貳番地　生文社

特別大賣捌
東京本郷區元富士町　盛春堂
仝　京橋區三十間一丁目　良明堂出張店
仝　神田區佐柄木町　東海堂
埼玉縣鴻巣町　長島本店

清少納言



文明之母第九號

明治二十二年七月十五日發兌

文明之母

○高等女學校と「國のもとゐ」

東京高等女學校は文部直轄の學校にして、高等普通學と教授するの校舍なり、世間高等の學校少なからざれども、女子に關するまた此の女學校に優るものあらざるべしとは、世人の一般に信ずる處、又信ぜざるべからざる處ふして、實際に於ても必らず然るべく、又必らず然らざる可からざるものなり。　而るに果して如何なる事實ありしが爲めか、如何なる仔細ありしが爲めか、豫てより兎角に評判宜しからず、近頃また頻りに一怪報を傳へ、高等女學校に關して實に忌むべき説を喋々するものあり、或は曰く、某女學校の校長教頭は、通常の教課外に一種不可思議の教授と爲せりと、或は曰く、某女學校の生徒は眞に言ふに堪えざるの醜行ありと、甚しきに至つては、

亦先生　穿レ靴束レ髮日昇レ黌、未レ至二破瓜一能解レ情、科程不レ啻讀書業一、誰知月老亦先生。

新教育　濃艶少女盡懷レ春、不レ學二儀容一學二笑顰一、誰識文明新教育、慇懃先問意中人。

などさへ詠ふものあるに至れり。　是に於てか、吾人は窃かに以爲らく、我邦女子教育

の上に於て、勇々敷大事こそ出で來りたれ……嗚呼此の醜聞、直接に於て、最も間接に於て、我邦女子教育の進路を防遏する必らず尠少ならざらん、文部省は何故に世評の眞僞を調査し、事實の探究を求め、世人をして早く其の惑を解くを得せしめざるやと。然り而して特に訝るべきは、誰しも其の新聞紙上、若しくは道路の說にして、苟も女生徒の不品行」女學校の不評判といへば、一もなく二もなく、悉く高等女學校と推想するの一事是れなり——其の枚擧すべからざる程の女學校に關する醜報は、決して獨り高等女學校にのみ限らざるべきに。世人をして斯く推想せしむる、必らずや其の源因なきに非る可し、成程其の教頭バチエロル、ヲフ、サイエンス能勢榮氏の國の基第三號に掲げられたる一篇の論文は、其の一大源因たるには相違なかる可けれども、吾人は決して啻に之れのみに非らざる可きを信ずるなり。

突然—實に突然、校長矢田部氏は生徒一同を講堂に集めて演說されたり、其の大意とする所を聞くに實に左の如し。

國の基なる雜誌に能勢榮氏の論文を掲げしより、近頃當校に關し、彼此の風說を來し、甚だ迷惑を蒙りたり、國の基は御承知の通り、當校の職員が關係して居るには相違なけれども、是れは本人一個人の話にて、學校の關係せしものに非ず。されば能勢氏の

論文も能勢氏自ら出したるものにて、私なぞ固より一讀もせざりしが、發兌後餘り世間にて彼是と噂されれば一讀致したるが、成程該論文は迚も道理に叶ふものにあらず、尤も能勢氏も真面目にて書きたるものには非ずして尚ほ未完のもの、由夫れに兎に角、此度の風評に、元々是と云ふ源因もなき事故、實際を知るものに反つて安心して、何心なくて居りたり。故に世間の風評に係らず、校内の景況に常の如く整肅にして、缺席されし方もなく、退學せられし方もなくして、(尤も一人高知へ兩親が歸縣の爲退學しあり)誠に安穏なりしに、私の誠に欣喜に堪えざる處にして、又皆様并に御兩親の學校を信ぜらるゝの厚きを謝せざるを得ず。尚私は是迄内に顧みて何にとて恥づるともなければ、世間の風評も餘り氣を留めざりしが、是よりは世の風評に對して些か誤を正すの方法をも行ふべければ、不日疑ひの雲も晴れ渡るの日あるべし。云々

俄然―實に俄然、夫れより一兩日中に、教頭能勢氏は非職を命ぜられたり。吾人は果して其の當時の世評に關して乃ち事なるや否やは勿論之を知らず。然れども文部省にても、世論の餘りに囂々たるより、事實の調査に着手し、現に榎本大臣には、矢田部、能勢兩氏を招き、近來高等女學校の醜評世上に喧すし、此儘に捨て置かば、我邦女子教育の進路に妨害を與ふること尠なからざれば、充分調査を遂げ、果して無實の虚報ならんには、夫れ

く雪冤の手續を盡さゞるべからず、若し萬一にも是等世評の無實なるを證明すると能はざれば、相當の處分を加へざるべからず、との旨を諭されたりと聞く。

嗚呼能勢氏の論文は、到底道理に叶ふものにあらずと公言せられたり、而して能勢氏も已に教頭の椅子を離れられたり、然らば之と同時に高等女學校從來の不評判の煙は、全く消え去る可き歟、世人の疑の雲は、忽ち晴れ渡る可き歟。吾人を以て之を見れば、是或は難かる可しと思はるゝなり、蓋し彼の好ましからざるの世評は、前にも已に述べたるが如く、決して彼の能勢氏一篇の論文のみに起因せざるを知ればなり。　然らば他に埋伏する處が源因とは如何。　國の基—國の基の記事—實に是れなり　元來國の基なる雜誌は、矢田部校長も明言せられたるが如く、眞に高等女學校の職員諸氏が關係し居らるゝあり、—實に其の雜誌を見れば、數氏の如き、其が發刊の發起者總代として、如何にも堂々と其の名を現はされつゝあるなり、故に其の記事中の一言一句に就きては。其の総代の諸氏が、之を全く知らずとはいふを得ざるなるべしとは、世人の一般に信ずる所なり。　彼の流言の勢力を増したる一篇の論文の如きは、全く記者の名を署せられたれば、其責め一に記者に歸すると雖も、無名の者ありせば果して如何………、兎に角彼の國の基なる雜誌の記事を見よ、(但し署名あるものは除き)其の亂暴なる、下品なる、優美の

處とてハ毫も之れあらざる、實ニ驚くべきにあらずや。第一號雜纂欄内「學生の行樂」と題する一項中にハ、爰處ニ書くさへ忌まはしき「やゝ〳〵と育ちあがりし優さ姿、おぬしの妻となるぞうれしき」とか「色にほだされ、ちぎりハむすだが、よせばよかつたこのまづさ」とか、此の如き類を頻りニ書き列ねたるを見るなり。(吾人ハ之を公ニせんが爲に記するに非ず公なるニ反對して記する迄なり)又第二號の同じく雜纂欄内、「皇后陛下東京高等女學校へ行啓在らせらる」の一項の如きも、其の生徒の形容を敍し、行爲を記する處など、如何ニも可笑しくして讀むニ堪えざるものあり、吾人ハ左に太宰春臺の神巫行を掲ぐ、實ニ殆んど斯の如しと言ふんのみ。

宕邱之山欝崔嵬、朝雲暮雨去從來、宕邱巫女何姣麗、弱質阿娜倚高臺、長者二十少二八、恰似芙蓉並蔕開、金釵玉簪羅衣裳、瓌姿瑋態極容光、耀若白日照屋宇、皎若明月臨池塘、聯娟雙眉不待畫、花顏豈假紅粉粧、盻睞已含無限意、一顧斷盡萬人腸、儻遇吳王便傾國、即入漢宮定專房、清歌妙舞眞絶倫、起雲行雨信有神、下略

第三號の雜纂欄内ニ又「あでこと」ある一項あり、是も團々珍聞、若しくハ吾妻新誌に掲ぐべきものニして、決して淑女をして讀ましむ可きものニ非るが如し。要するニ國の基ハ其記者自身こそ「炬燵に入り足を投げ出して讀まるゝが如き種類のものニ非ずして

寧ろ白襟紋附きにて坐を正うして讀まれんことを望むものなれば云々と言へるれど、も第二號四十三丁吾人は左様に受取れざるなり、乃ち炬燵に入り足を投げ出して讀むべきものゝ様に思はるゝなり。夫れ潺々として流れ去る流水を見て誰しも既に其の源泉をトせんとするへ、翩々として墜ち来る落花を見て誰しも已に其の樹木を知らんとするへ。嗚呼國の基は高等女學校より流れ出るの流水には非るか、高等女學校より落ち来るの花片には非ざるか、（高等女學校職員の諸氏が其發刊總代人として署名せらるゝ限りは）然り而して此の流水、此の花片にして、斯の如くに濁り、斯の如くに美ならざらしめば、誰しも其源泉、其の樹木も同じく濁り、同じく美ならざるものとせん、是に於てか吾人は言ふ、高等女學校の評判を能くし、高等女學校に就きての誣言を除かんと欲せば、先づ國の基の記事を慎み、國の基に就きての評判を善くせざる可からざると。

論説

○女子教育論

越智直

數年以来、女子教育の論勃然として四方に起り、曰く凡そ國の文明に進むや、必ず先づ

女子の地位を尚むるに在り、故に之を奬勵せざるべからず、曰く女子をして智識なくんば、我社會の事業は男子之れ負擔に任ぜざるを以て、之を振興せざるべからずと。其說く所、論ずる所、主義目的の異なるに從て、方便にも亦差別あるは固よりなれども、要するに皆女子の教育をして、一層進歩せしめんとの意に外ならざるが如し。然りと雖も、凡そ社會の事業、其何たるを論ぜず、勃然玆に起るの時に於ては、人々深く其目的方便の如何に注意するに暇なく、遂に嚮きの奬めて以て盛んならしめしものは、却て後の害となり、將た無益の徒勞に歸し去るものなしとせず。　是を以て苟も社會の先進たるものが、一事を唱導するに於ては、深く顧みて而して後に其方法を示さゞる時は、人を誤まる蓋し亦多し、愼まざるべけんや。今や女子の教育は次第に其歩を進め、從て諸種の學校は、日に月に設立せらるゝに至りたるは、甚だ喜ぶべきなり。然れども此等諸種の學校が、施す所の方法と、取る所の主義とは、能く我社會に適するや否やは、蓋し未だ斷言し能はざる所なり。　余竊に今日女子教育の有樣を察するに、未だ能く之が方法を盡せしものあるを見ず、故に自ら譾劣を顧みるに暇あらず、之が論を作る、今紛雜を免れんが爲に、之れを過去、現在、未來の三項に別ち、順序を追ふて之を述べん。

「過去」　女子教育過去の有樣は如何なりしか、其由て來る所を察し、以て現在の教育に

我國開闢以来茲に二千有餘年、其間女子教育につき、幾多の變遷ありしは勿論のことにして、余は其太古にありては如何なりしやを知る能はざるも、應神帝の前後、我國に支那文學の輸入せられしより、下りて中古に至る迄の間には、女子の教育につきて見るべきものなし。王朝の頃より、女子にして文學を修むる者あるを見る。冷泉一條の頃に及びては、紫式部、清少納言等の名媛輩出し、源氏物語、枕の草紙等の著書もありし程にて、此頃は日本文學の盛時とも謂ふべき時代なりしを以て、上流には女子にも斯る才學ある者鮮なからざりし也。然るに藤原氏權を失ひ、武門政を取るに至りては、人々競ふて武勇を尚び、男子の教育すら地に墜ち、文學の事は山門の僧徒僅に之を修むるのみ。女子教育の如き、固より問ふに足らざるなり。徳川氏天下を治むるの後に於て、儒學大に興り、爾来江戸に昌平校の設あり、諸藩亦之に倣ひて學校を興すに至りたり。此際の教育は專ら、忠孝彝倫の經學と、文章歴史に止まるが如し。而して之が教授を受くるものは、所謂士族にして、男子と雖も百姓町人の輩に至ては絶えて、高尚なる教育を受くるに道なかりしは、固より封建制度の時代の然らしむることなれば怪しむに足らず。扨女子の教育は如何といふに、百姓町人は尚更、士分以上の者に至るも、絶にて之なしと云ふも可なるに似たり。唯性の好める者は

自ら諸藝を習ひ、父母の稍々心掛けよきものは子女に授くるに、貝原先生の女大學等を以てしたるに過ぎず。蓋し此時代に於ては、女子の境遇は實に憐れなる者にて、夫の女大學は盡く儒教の主義に規りて條目を立てたるが故に、所謂男尊女卑の極を以て貫かれたるものなり。今日の時代より見れば、誠に怪むべきも、畢竟女子の教育は男子の教育に伴はれたるに由るものにて、止むを得ざる次第なり。抑も女大學の取る所は、儒教の主義にして、女子が受くる所は、斯の如きものに過ぎずとせば、有用の智識を収得するの學科は、固より之を修むるを得ず。唯封建時代に適合せさる女徳は、稍々之を以て修め得しやと思える。然りと雖も儒教の説く所の主義、長上に服從するの點に於ては至れり、獨りを慎しむの點に於ては盡せりと謂ふも可なるやに似たれども、己が女子たるの本分を果すべき育兒家政等を説くに至りては、殆んどなしと謂ふべきなり。　而して諸藝に於ては箏、三絃の類に屬するの音樂より、茶の湯、活花等の末技も、其好めるものは偶く之を修むるも、此等は實に贅澤の遊藝にして、士分の輩と雖も餘程の高禄にあらざれば習ふこと能はず。　然るを況んや其他に於てをや。　其他歌道は其の入ること容易なるを以て、時に或は之を嗜むの女子あるにもせよ、此等は固より大海の一滴とも謂ふべき程にて、敢て算するに足らざるなり。　右に擧ぐる所を以て見れば、女子教育過去の

有樣は或る一部の人に限りて之を受け、其學ぶ所は封建的女德を養ふに止り、文學技藝は贅澤の餘課に過ぎず。即ち過去の女子教育は、閑散なる女子の爲めにしたるものにして、普通の點に於ては決して望みなかりしなり。一言以て之を覆へば、女子教育は閑人の玩弄に過ぎざりしのみ。

「現在」然らば女子教育現在の有樣は如何と察するに、此また深く考察を要すべきものなり。德川政府既に倒れ、封建的制度は其善惡是非を顧みるに暇あらず、一にも二にも皆泰西の風俗人情を移し來りて、我國に輸入するに至りしを以て、人々競ふて泰西の學を修め、彼の風俗に倣はんとし、遂に明治五年の學制頒布に至れり。而して此學制は實に我國教育の一大段落を附くる所にして、爾來十有余年、大中小の學校は駸々として日に盛大を極むるに至り、男女共に相當の教育を受くるを得るに至りたるは、實に明治昭代の恩澤とも謂ふべきか。然りと雖も積年の餘習は、容易に打破ること能はず、因習の久しき、其教育が重に男女の一方に傾くありしは、自然の勢たるを免かれず。是を以て小學校に於てすら、尚女子の就學男子に比して其半數をも占むる能はざるは勿論、尚進んで中學已上の學科を教授する女子學校の世に顯はれざりしは、固より免る能はざるの數ありき。然るに社會は久しく一定の所に停止するを厭ひ、男子の教育が日進月歩の

今日に至りたるを以て、之に對する女子の教育も亦必要なりとて、先進者が此數年已來頻りに皷舞奨勵せし結果にや、近來勃然として女子教育の萌芽を長じ、恰も春宵の膏雨に、四方の山邊も色めきて、今や青葉茂れる大幹をなさんとするの勢あるは、實に我社會も喜ばしき社會となりぬべきの樂ありと謂ふべし。從つて女子教育に屬せるの學校は、諸方に設立せらるゝに至りたり。或は宗教の目的に依て立つ學校あり、或は職業を授くるの學校あり、或は優美なる婦人を養成するの學校あり、或は稍々高尚なる一二學科を授くるの學校あり、其數の多きは東京にして、他府縣の都會にも間々見受くる所なり。女子教育の氣炎亦熾んなりと謂つべし。

夫れ然り、然りと雖も細に其内部を觀察し來る時は、余未だ完全なる女子學校、否今日の社會に適する女子教育場なきの憾あり。今日女子教育が、前已に述ぶるが如き氣炎を吐きしは、如何なる次第なりやと顧みれば、男子の教育の進歩に伴はれしに相違なかるべし。故に幾多の女學校はありながら、其學科は概ね男子の教育を以て目的とせしものを、其儘移し來たるに過ぎず。或は然らざるも、男子の修むべき學科に交ゆるに、僅に裁縫等を以てしたるに過ぎざるべし。寄宿舎の制の如き、一に男子の取扱法に規りて、女子養成の法に適したる法を設けし處は、甚だ少きに非ずや。故に女子寄宿生の如

き、疎豪自ら甘んじ、男子にあらず、女子にあらざる一種特別の異風をなすに至れり。概して之を舉ぐるときは、能く我國現時の狀態を洞察し、女子教育は如何にすべきやを考究して設立せし學校は、實になきが如しと云ふの外なし。畢竟するに、女子教育の必要よりして目的を立てたるにあらずして、唯男子の接伴たるを以て、斯の如きに至りしならんか、歟かはしき次第ならずや。

尚ほ細に女子が學ぶ所と察するに、好んで以て修むる所は、曰く英語なり、曰く音樂なり、曰く舞踏なり、其實業に屬する科としては、洋服裁縫なり、編物なり、造花なり。此等の外、固より一二の學科あるにもせよ、就學者の志望のある所は、以て學校の學科を制するに由り、何れの女學校に於ても、右等の學科は多數の時間を占むるは勿論なり。否らざれば宗教家の立つる學校なれども、是れ唯一の目的は、宗教を擴張するにあるとなれば、祈禱信神は最要の地位を占め、之に次ぐものは英語の一科に止まれば、女子教育の目的より之を見る時は、絶えて益する所なきが如し。嗚呼此種の學科を學び得しものは、如何なる地位に立ちて、始めて能く其腕前を顯はし得べきか。高等官の夫人に非ざれば、豪商の妻君ならでは用ふるに所なし。今日幾多の學校に出入する女生徒は、果して皆高貴富豪の令孃ならばイザ知らず、余の見聞する所を以てするに、田舍の士族が手内職

の金を仕送りて學ばしむるものも多からん、小商人が他日成業の後を目的とし、金を借りて學資となさしむるものも多からん、未だ以て盡く餘裕ある人々なりとは斷言すべからざるに似たり。然らば則ち此輩が卒業の後嫁するの家は、亦其家産に應ぜざるべからざるは勿論にして、英語、舞踏、編物、音樂等の上品的腕前ありたればとて、一朝にして職が伏屋を脫出でゝ、錦を飾る玉の輿に乘るを得べきか、到底此等は望外の僥倖として見るべきものなり。扨我國中等以下の家に嫁するとせんか、風琴、ヒヤノは孰れも能く備へ得るか、平常の交際に英語の必要ありや、編物は以て家計の資を得るに足るか、八疊の小座敷に舞踏の演習をなさば、天井に頭の支ゆることもあらん。然らば斯の如き贅澤技藝は一切之を藏め、さて家政を取締り、子女を教育し、良人の補助とならんと欲するか、未だ其術を知らず、亦如何ともすべき樣なく、苦學十年、業始めて成るの日は百憂胸に滿ち、萬感身に纏ふの時なるのみ。人或は余が謂ふ所を以て酷なりとせん、是れ實際今日に於て往々見る所のものなり。嘗て人あり、余に告て曰く、余が知己に一女子あり、既に其學校を卒業せしが、其女子尋常の家に嫁すること叶はず、當人も自ら高慢になりて、容易に緣を求めず而して得意の學科を問へば、英語、音樂、舞踏なり、其兩親は今にして生中教育に心を傾けさるを後悔せりと。斯る嘆言は實に尤なる次第と思はるゝなり。

嗚呼女子教育の現在の有樣にして斯の如くならんか、寧ろ始より學ばざるの優れるに若かずと云ふも過言にはあらざるべし。然らば則ち實際に於て、女子教育の法は如何にすべきや、考察し、以て將來の策を立つるは、實に現今教育家の任ならんか。請ふ試みに之を論ぜん。

「未來」前段既に論述せし如くば、今日の女子教育は、實に交際的學問と謂ふべきのみ。此等の學問は、上流社會に於ては用ゐる所あるべきも、之を以て普通の女子を教育するの方法となすに至りては、余の決して與せざる所なり。余竊に憂ふ、今日の女子が滔々として、此流行海の風潮に漂ひ、飄乎として歸する所を知らず、迂濶にも虛飾の技藝にのみ心を焦がすに於ては、己れは空しく利器を懷抱して、身は不運を歎ずるも、社會に於ては斯の教育に成長せし女子を容るゝに地なく、卻て擯々て實用に適せずとせられんも計り難し、今日多數の女學校にして玆に顧みる所なきは、甚だ歎ずべきの至りなり。眼を放ちて我國今日の大勢を見よ、憲章文物盡く備はり、法律制度能く行はれて、遐遠の地亦怨嗟の民なきか。農工商の實業は既に進歩して、生産物は年々其量を增し、製作品は其精を極め、貿易場裡に輸贏を外國と競ひ、果して能く彼を凌駕するを得るに至りしか。數年以來、民力非常に疲弊し、年豐かなるも民尚凍餒に叫び、民間の有志間に施政を批議し

て不平を訴ふるあり。未だ以て人生の目的たる、快樂を得て幸福を享くるの社會あらざるなり。要するに百事創業に屬するもの多く、今將に緒に就かんとし、或は尚計畫の中にあるものもあり、實に國事多端、各人額に汗して、食と衣とを求むるに急なる時にして、之を歐米の文明國に比するに、遠く及ばざるは勿論なり。故に苟も我國民たるものは、進んで國本を培養することを是れ勉めざるべからず。即ち文明に進むべき材料を作らざるべからず、徒に巴里城裏の交際社會の有樣を夢想し、歌舞管絃、一夜の宴會に萬金を擲去して豪奢を鬪はし、綺羅錦繡寶石と飾りて、人々衒ふの風を移し來りて、直ちに之を我國に行はしめんと欲するものは、未だ民度の如何を知らざるものなり。鹿鳴館上、和氣洋々として歡樂するものは、實に或る一部の種族に止まるのみ。嗚呼今の女子は徒に夢思空想、此等の現象に迷はされざるか、卿等は盡く皆上流社會の夫人たらんと欲するか、否らざれば何ぞ少しく我國今日の社會を顧みざる。古人曰く、國亂れて良相を思ひ、家窮して良妻を思ふと、我國今日の有樣を以て見るに、家誠に窮せりと言はざるべからず、誠に良妻を思ふの時なり。良妻なるもの、交際的學問を以て足れりとするか否交際的學問は困窮の家に於ては大なる用なきなり。女子教育を掌るもの、何ぞ少しく社會の大勢を察せざる。女生諸君、何ぞ久しく流行の波に漂ふや。

嘗に思へ、歐米文明の花は何によりて、彼が如く爛熳として美麗なるか、蓋し原因なくんばあらざるなり。　之が要素種々あり、無形理學も大なる力を以て進歩を促したるは勿論なるべきも、畢竟有形の理學が此十九世紀に大なる進歩を顯はして以て、斯くは美しき花を開きさるには非るか。　果して然らば、文明の基礎を作るものは、有形の理學なり、開化の段階は有形の理學なりと謂ふべし。今や我國の女子が學ぶ所のものは、彼の既に發達したる社會の外形なり、虛飾なり、本未だ立たずして徒らに末に走るものは、物の順序を知らざる愚人の爲のみ、社會に何の効かあらん。　試に一般の女子の有樣を忖度するに、火は如何にして燃ゆるや、草木は如何にして成育するや、食物は如何なる變化を受けて人身に榮養をなすや、等實に近易なる理をも能く解し得るもの、果して幾人かある。　荒誕妄說を信じて、人爲の偶像を拜し、風習と祈りて怪まざるが如きは、實に多數を占むるに非ずや。　其の平生の談話を聞くに、概ね演劇の咄にあらざれば、他人の批評に止まり、或は背理の虛構說を得意に談ずるものなるのみ。　斯の如くんば、何を以て女子が本分として盡す可き育兒の法を全ふするを得べき。　何を以て家政を整理することを得べき。　生理的教育的理法に適ひたる育兒は、能く之を實行しつゝあるか。　衞生經濟の理法に適ひたる家政は、能く之を爲しつゝあるか。　是等の事固より理學の智識

なくては容易にあらず。能く其半ばをも實行するの婦人は、蓋し千百人中一人のみと言ひて可なり。概するに一般女子の智識は、至て淺薄なり、女子の智識なくして斯の如くんば、一國の文明は容易に望む能はず。嗚呼今後女子の教育も亦難い哉。

人の最も不幸なるは貧くして才學技藝あるものならんか。古より利器を懷抱して、空しく坎軻を歎ぜし士が、滿腔の不平を世に訴へて、己れを賣らんとしたるも、随分苦痛なることゝ、察せらるゝなり。近來教育の道益々開け行くに從ひ、人々相爭ふて高尚なる學問をなし、遂に不生産的の業に從はんとして、失望するもの多きも、畢竟は身分を計らずして、徒らに高尚なる學問をなせし罪のみ。今日女子教育の有様亦之と同じきことなきか。英語、編物、舞踏等贅澤の學問技藝は、中等社會に於て、決して左程の用を爲さゞるものなり。然るに一般女子滔々として之を學ばゞ、他日卒業の後は空しく身の飾りとなりて、毫も實用に適せず、轉た世間を歎つが如き場合に至らんとは、余が前既に述べたるが如し。余は女子の教育は益々盛んならんことを望む、然れども身分を考へざる輩の爲す所を憫まずんばあらず。

前論之を概括すれば、女子教育の過去は、閑人の玩弄に過ぎず。現在は交際的學問に流る。交際的學問亦た要なしとせざるも、今日我社會は未だ充分に發達せず、女子の智

識は至ッて淺薄なり、虚飾の學藝を後にして、有用の有形理學を進歩せしめざるべからず。而して各家の貧富に應じて、其度を異にせざるべからずと謂ふに在り。即ち女子教育將來の目的は、社會の有樣に適合すべきこと、身分に應ずべきこと是なり。嗚呼女子教育の任に當るの人、進んで學ばんと欲するの女子諸君よ、余が言の妄ならざるを知らむ、幸に之を取り之に據れ

○紫式部と清少納言

柳所隱士

紫式部は藤原爲時の女にして、右衛門佐藤原宣孝に嫁し、二女を生む、姉の賢子は大宰の大貳高階成章の妻となりし故、後に大貳三位といひ、妹は辨の局といひて、後に後冷泉院の御乳母となる與に有名なる婦人なり。清少納言は（少納言は官名なり）清原元輔の女、故に清少納言と呼ぶ、一條院の皇后宮定子に仕へし官女なり。二人（紫式部、清少納言）與に男子も及ばぬ程の博學多才にて、最文藻に富み、其の著したる草紙物語等は古來我國文學上に、雙びなき寶としてめでらる、事にて、其の文章が優美巧妙なる、其の思想の富麗豐艶なる、實に驚嘆するに餘あり。如何に今文學を尚び古文學を卑しむ人も、一たび源氏物語を讀み、枕の草紙を繙くときは、又卷を掩ふ能はず、大に其の持論を翻が

へきんとするに至るなり。如何に漢文の外に文章なしと思惟せる人も、一たび源氏物語を讀み、枕の草紙を繙ては、又手を釋き能はず、大に其の所見の狹隘なるを悔るに至るなり。如何に洋文に心醉し、和漢文を擯斥せる人も、一たび源氏物語を讀み、枕の草紙を繙きては、又眼を他に轉ずる能はず、大に其の前說の誤謬なるを覺るに至るなり。嗚呼此の紫女の此の物語、此の清女の此の草紙は、實に千古の神品、邦文の摸範、又實に國家の花なり、二女の才學真に恐るべきかな。宜なり、溪の小川に衣濯ふ賤の女も、山の徑に柴苅る田舍童も、紫清二女と云ふを知らざるなきのみな弁稱へて措かざるや。

二人共に斯ばかりいみじき女流にて、其の才學はいづれ優劣なく、常に好一對として并び稱へらるゝなれど、少しく其の裏面に立ち入りて之を見れば、いたく異れるふし多く、真に黑白の差ありともいひつべし。頃日三上參次氏は二女を評騭して謂ひらく、紫式部は醇乎として醇なるものにして、清少納言は大醇にして小疵ありと。然れども余を以て之を見れば、是未能く二女を評し得たるものにあらず、余は言はんとするなり。紫式部は醇乎として醇なるものにして清少納言は小醇にして大疵ありと。請ふ少しく之を左に述べん。

紫式部は性温厚恭謙にして己學あり才あるも毫も是に誇ることなく、其の人に對す

る最從順にしく、萬しとやかに行ひいと優美の風ありて、また見聞苦しき行爲などは實に露ほどもなかりけり。斯かれば女子の身に最尚むべき可憐可愛の分子多く、千載の下より其の人と爲りを追懷するも何となくゆかしく慕はしき風情あり。今余は少しく其の聞き知れる處を記して之を證すべし。寛治四年、式部が寡婦となりて仕へ奉りし上東門院、まだ中宮と申奉りし時、式部に白氏文集の樂府を習はせたまひしことあり、其の頃門院の御父御堂關白道長公、式部が夫に別れて寡婦ながらに宮仕へするに、容儀最とうるはしく又甚才智ある女なるを見てたび／＼戲言など言ふことあれども、いつも品よくもてなして、毫も顧みることなかりし。是等のことは、彼の式部の日記にて窺ひ知らるゝなり。寛弘六年の比、式部の作りし源氏物語、門院の御前にありたるを、道長公一覽ありて、例の戲言ありし序に、梅の折枝に敷きありし紙に一首の歌をかゝれたり。

「すきものと、名にしたてれば見る人の、おらで過るはあらじとぞ思ふ。」

此の意は、梅は味の酸きものなるを「好き者」とかよはせて、式部物語を書きて色好といふ名立ちてあれば、見る人が梅を手折るごとく、式部と其の儘に見すごすことはあるまじと思ふ、と又戲れたるなり。偖式部は其の返歌に、

「人にまだ、折られぬものを誰かこの、すきものぞとはくちならしけん。」

や詠みたり。其の意は、左様なる仰せらるれど、夫より外の人にはまだ手折られぬものを、誰か色でのみなりと申ならしさふらふぞ、といふ事なり。又或時式部、渡殿に寐ねし夜、頻りに戸を叩く者ありしが、式部は音をもせで夜を明したるに、其翌朝道長公より、

「よもすがら、くひなよりけになく〳〵、槇の板戸をたゝきわびつる。」

といひ送されたり。此の返しに式部、

「たゞならじ、とばかり叩くくひな故、あけてはいかにくやしからまし。」

故尾崎雅嘉翁いへるあり、曰く、夫婦人の志丈夫と異なり、才あつて文學に長ぜるときは、かならず夫を輕しめ人を侮る、小野小町清少納言の類これなり、極めて終をよくせず、式部其の才ありながら、其の行を慎み、若きよりやもめにして二夫に見えず、賢なりといふべしと。玉の小櫛にもまたいふあり、曰く、女の學問だてしてさかしだちざえがるをば、いみじうにくみて、自らも人にしかおもはれじと、深く用意したるさま所々に見えたりと。尚ほ其の精しきを知らんと欲せば、安藤爲章の紫女七論を見るべし。

余は竿頭一歩を進めて、更に言はまくもることあり。何ぞや。式部が能く育兒の法に通ぜしこと是なり。此の事に就き余は別に證據といふ程の證據を見出して讀者に報道するを得ざれども、兎に角其の生きし處の二女が、與に賢明にして名高き婦人となりし

を以て、何よりの確證なりと信ぜざるを得ず。乃ち其の長女大貳三位は、有名なる彼の狹衣の著者なれど、敢て贊せず、其の次女辨の局も亦才學の聞えあり、後後冷泉院の御乳母となる、其の委細は榮花物語の楚王の夢の巻、殿上花見乃巻などを見れば明らかなり。

清少納言は性驕慢にして淫奔なる行爲さへ多く、己が才學を恃みて好みて人を凌ぐの風ありけり。ある夜己が許に通ひ來ぬる男をいひつくめてかへしける事など、自著の草紙に見えたるが、斯かる事をもて己が快樂とせるさへあるに、耻かゞやかしきことゝも思はず、ほこりがに物に書附けつるにこそ其の人と爲りの程を見るべし。其の躬行に就き、特に非難すべきことゝも多くあるは勿論なれども、一口にいへば皆淫奔なる事にこそあれば、余は茲に記して紙面を汚すを欲せず、讀者幸に諒せられよ。兎に角唯紫女の柔和に優美に、愛すべく慕ふべきに引きかへて、彼の惡むべく厭ふべき御轉馬女とかいふものゝ風を帶びたりと思へば、其れにて充分なりと知るべし。三上參次氏の評言に曰く、清少納言はあまり當世風にして、學問に誇ること常に、內行もまた修まらず、之を今日の世の中にあてはめていはゞ、耶蘇教の學校にて教育を受ける女生徒の如く、男子と伍するを何とも思はざるのみならず、時々所々に英語にても挿みて議論を試み、男女の同權をも唱へんばかり活潑なる女性なりと。まづ能く清少納言を評し得たるもの

といふ可し(之と對比せられたる耶蘇教の學校にて教育を受けたる女生徒とは、少しく氣の毒なれども)

尚ほ能く二女の性情の異なるを知らんと欲せば、其の二女の著したる草紙物語の文章を見るべし。文章は實に心の寫眞なり、故に之を見れば、自ら之を書きなしたる人の性情を見るべきなり。試にまづ源氏物語を採つて之を讀め、其文勢如何にも沈着にして、厚重山の如きを見るべし、雄深谷の如きを見るべし、又瑰奇鉅麗、宮闕の巍々たるが如く、巖廓の翼々たるが如きを見るべし。次に枕の草紙を採ツて之を讀め、其の文勢如何にも逍遙として、排蕩川の方に至るが如きを見るべし、泉の始めて達するが如くなるを見るべし、又縱横變化、海龍の出沒するが如く、蜃氣の樓臺を生ずるが如きを見るべし。勿論二書與に、互に長所あり妙境ありて、輙く其の間に軒輊をなしがたしと雖も、文品の異なる實に千里のみならず、眞に著者の性情を窺ひ知るに充分なり。

若しも讀者諸子にして、輙く源氏物語、枕の草紙を讀み得ざるものあらば、則ち彼の誰しも知らざるなき百人一首中の、二女の歌を求めよ、而して之を吟誦し、味へよ、僅々三十一字に過ぎざるも、尚ほ能く詠者乃ち二女の性情を知るに充分なるべし。

「めぐりあひて、みしやそれともわかぬまに雲がくれにしよはの月かな」　紫式部

嗚呼何ぞそれ優美なるや、是れ新古今集上に「はやくよりわらはともだちに侍りける人の、年比經て行あひたるが、ほのかにて、七月十日ごろ、月にきほひて歸り侍りければ」と有るものなり。乃ち以前より幼友達にて有たる人が、年數を經て後出であひたるに、慥に其の人ともおもひ定めぬ間に、七月十日頃の夕月の隱るゝにおとらず、彼人も歸りたるを、本意なく思ひてよみたるなり。其の命題既にかく優美にして面白し、宜なりかの優美にして面白く、百誦厭はざるの歌となるや。歌の意は、月も空をめぐりては又出るものなるが、久しぶりにて廻り逢ひて顏を見たるは、實に昔の友達なりし、その人かとも判然見分かぬ間に、雲に隱れたる今宵の月のやうに、早くかへりし其の人の殘りおほさよ、といふとなり。實に優美を以て充ち溢る。

「よをこめて、鷄のそら音ははかるとも、世におふさかの關はゆるさじ」。清少納言

嗚呼何ぞそれ艶麗なるや、是れ後拾遺集雜二に「大納言行成ものがたりなどして侍りけるに、内の物忌にこもればとて、いそぎ歸りて、つとめて鳥の聲にもよほされて、といひをこせて侍りければ、夜ふかゝりけん、鳥の聲は函谷の關のことにや、といひつかはしたるを、立かへりければ、これは逢坂の關に侍る、とあればよめるとあり。其の命題既に斯くの如きものなり、故に其の歌も唯艶麗なり、優美なること能はず。歌の意は、函谷關の關守

はまだ夜の明けぬ中に、そら鳴の鳥の聲にてたぶらかさるゝとも、（孟嘗君の函谷關を過ぎたる故事）世の中に君の如き空言をのたまふ御方に、逢ふといふ逢坂の關は、妾はゆるし侍るまじ、と戲れて詠みしなり。妙は乃ち妙なり、然れども實に艷麗たるに止る。

嗚呼紫式部、清少納言は、實に無雙の閨秀にして、學問の該博なる、氣韻の高雅なる、互に相伯仲し、所謂姉たり難く妹たり難きものあり。然れども其の性質品行を見れば、相距ると甚だ遠し。如何に才ありとも、如何に學ありとも、德なければ又何かせん、清少納言は實に才學ありて女德なきものなり、紫式部は才學と女德とを兼ね備ふる者なり。余故に曰く紫女は醇乎として醇なる者なり、清女は小醇にして大疵あるものなりと。

余は二女を論じたるの序に、一言讀者に問はんとす、讀者は此の二女の性質品行を見て、如何なる感想あるか。顧ふに近頃我邦開明の度大に進み、百事維新なるに從ひて、女子の教育の如きも、漸く世人の注意を惹起し、之に關するの學校も勃々として頻りに設立せられ、之に關する雜誌などの如きも、十幾種の刊行を見るに至れり。隨つて婦女子の面目一變して、成程頑陋愚昧なる者のみならざるに至りしのみか、實に吾人の耳目を驚かすばかりに、此處に活潑雄壯なる女丈夫あるを見、彼處に學識博洽なる才女子あるを聞く。然れども此の女丈夫、此の才女子は、其の該博なる學識を有すると與に、善良な

る德義をも有するか。學識と德義とは幷び有せざるべからざる者なり、左るが中にも德義こそ殊に重んずべけれ。學問智識のすぐきんよりは、寧ろ行惡しからざれ。余は聞く、今の女子は少しく方角の字を知りて、直に角立ちさる行をなし、聊蟹行の文字を讀みて、忽ち直なる道を踏まざるを。斯る女子の常として夫に事ふることをはせず、又夫を助くることも能はず、況して兒子の教育を爲し得んや。余は又聞く、眞に學問智識を備へ、妻となりては夫を助け、母となりては子を教ふるに足る、天晴めでたき女子ぞと覺ゆるものは、多く自負の心のみ長じて、日本の男子誰かは我に及ぶべきなど言ひの、しり、結婚をさへ嫌ふ者往々之れ有りと。嗚呼是化物のみ。畢竟するに今の女子は重に剛をのみ知りて、柔を知らざるなり。剛をのみ好みて、柔を好まざるなり。故に剛にのみ馳せて、柔を顧みざるなり。然れども女の德の剛ならずして柔なるとて、自ら定りて、人力の動し得ぬものぞかし、隨ツて如何なる女英雄、女豪傑なりとて、いかでか剛をもて男子と幷立つを得んや。女子はたゞ一筋になよ竹のなよやかなるこそよけれ。たとひ艶麗喜ぶべき容姿あるも、優柔愛すべき行爲なきの女子は何かせん、男花に靡かぬ女郎花を誰かは愛づべきぞ。然れども余は強に卑屈なれといふにはあらぞ、柔なれども折れざるは風に逆はぬ柳の如く、其の貞操は木枯に色かへぬ松の如くなるべしと謂ふなり。嗚呼婦人の

摸範ともなるべき身を持てる女子にして、片山里のあやしの家に住居せる賤の女にも恥づべき行ありては得なるまじ余は大聲疾呼して是等の女子に告ぐ清少納言とならずして紫式部とならんことを心懸けよと。又女子教育に從事せらるゝ諸君に告ぐ、幾多の清少納言を養成せずして、幾多の紫式部を養成せんとに注意せられよと。

猫の毛ならばいざ知らず、文章に班あるは如何にも見苦しきものなり。右の一篇の文章は、所謂其の班なるものにして。定めて讀者には見苦しきことならん。然れども文明の發第九號の草稿盡く纏まりたるの後、前號に紫式部の肖像を掲げ、本號に清少納言の肖像を載せたるに因み、急に二女の事に就き平常考ふる所を述べんとして、草卒に筆を執りしものなれば、遂に此の極に陷りたるなり。讀者請ふ少しく恕する所あれ。且つ既に斯かる譯なれば、文章の外、又別に不都合なる箇所も極めて多かりなん、是またいたくな咎めたまへぞ。

柳所隱士草卒に識す

文藝

○箱根の木賀に浴して

中郡秋香

風はうき世の塵をはらひゝ心そゞろに涼しく、雲は山窓ふかくとさして身はさながら仙人とやなりぬらん。若葉がくれになく鶯の聲ねむるいのゆめに入りて日いよ／＼ながく、あけひをつたふ水のおと寝覺の枕をとひて曉まだ／＼清し。眠たげな書のひもとき、浴してはそゞろありきを。谷川に衣あらふ子、高嶺にたきゞこる翁、いづれか我が形の友ならざる、谷川の水、高嶺の月、いづれか我が心の友ならざらん。あはれ／＼人のよには、かくてころとれもふよも、

箱根山、こよひの空にすむ月は、都にてみし影にやはあらぬ。

○熱海名勝のうち　　中郷秋香

温泉寺の古松　千歳經て、くちぬ其名をくらぶれば、松の齡はかぎりありけり。

大湯の沸騰　湧いづる、湯のけは雲と立まよひ、空よしらぬ神ぞとゞろく。

伊豆山の晩歩　心さへ、涼しくなりぬいやさかき、神のみいつの山めぐりして。

魚見岬の魚見　かのみゆる、魚見がさきの一つ庵、心のゆきてとはぬ日ぞなき。

○月前落花　　竹屋雅子

月は夜深うなるまゝに、ひるよりもはしたなうすみ登りて、風のけはひいとしめやか

に、花の梢も一入まされば、はし近ふふして見出したるに、吹くとおき風に、花の一ひら二ひらばかり、ちりたる身にしみて心もとなし。

關根正直、下田歌子の二氏が、去る廿二日芝紅葉館にて開きたる國風音樂會の爲めに作られたる歌は左の如し。

○乙女子　　關根正直

乙女子が乙女さびはとから錦、袂あたりに紫の、雲乃通ひ路飛とりの、淨見が原の御宇とかよ、うすみをまけて舞いでし、華の姿と美よしのや、吉野の川の波の音、通ふ調の松風も、枝もおらさぬ君が代の、ためしとおりて美そおわを、迦陵頻伽のひゞふしを、寫してこゝに乙女さびをも。

○吉野の雪　　下田歌子

よしのゝゆきにみちたえく、都に歸へれとありつるは、細谷川の瀬をはやを、落ちて行衛も志らぬ身の、思ひ者をもぐしていと、義理もおさけも辨へて、志づの小田巻操りかへし、ことゝし給ひしてこその葉に、かえす言葉もなよたけの、操の色は替らじと、おもふ計りを知あら草

○千壽

燭暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲

下田歌子

御いたはしやいとほしや、昨日は翠帳紅閨の中に錦をかつき綾としき、かほどの籠りゐたまひなん、比翼連理の夢さめて、今日は東にとらはれの、御身とならせ給ひては、旅雁の妻を慕ひ、孤猿の友を呼ぶ聲ならで、寐覺こそ問ふものやなからん。

一樹の蔭一河の流れも、他生の縁と聞くものを、鴛鴦のふすまはかさねず共、同じ席に一ツ床に、あけくれなす、べ參らせて、君が衣の移り香を、何時の世には忘られん、流水去つてかへらざれば、落花いかでとまるべき、假の宿りにむすびつる、露のゆかりをわすれずば、清き汀に咲くといふ、蓮の臺の上にだに。

吾人は好んで古人の隨筆を讀む。蓋し隨筆なるものは、大家が殊に意を經ずして、其の感ずる所、見る所を筆のまに〳〵書き續ぎたるものにして、極淡極平、津々として味ふべき、却て經營慘憺の意を經たるものより勝れるものあり。故に是より吾人は、吾人が常に愛讀せしものゝ中、未だあまりに世人に知られざるものを記載し、大牢の一臠を讀者諸君に頒たんとす。左に記するものは、梅華仙史の隨

筆中、殊に文藝に關係せるものを抄したるなり。

梅華仙史　橘　春暉　著

○北窓瑣談抄

吉野の何院とやらんに、後醍醐天皇御製の和歌あまた傳へさる中に。

大かたに、れもにゆなかと、立歸り、治まらぬ世を、こゝろにぞ問ふ

身にかへて、思ふとだにも、しらせばや、民の心の、おさめがたさに。

この二首は殊に耳にとまりて聞ゆと、佐々木のぬしの物語せる、誠に英明の聖主、その時代のことゞも此の歌にておもひやられぬ。

鎌倉右大臣の。

もののふの、矢なみつくらふ、こての上に、霰たばしる、那須の篠原。

また、

箱根路を、わがこえくれば、伊豆の海や、沖の小島に、浪のよる見ゆ。

皆悲壯、今時の非弱なるに似ず。然るに其の父の風に似ずありしは如何、もしや野史の傳ふるところ真ならざるにや、

天明戊申の禁裏炎上に小澤蘆庵

今朝見れば、燒野のゝらと、なりにけり、こゝやきのふの、玉敷の庭。

感慨あまりあり。又西洞院殿の

さちまよふ、煙の中に、おもふぞよ、けふの御幸の、つゝがなかれと。

忠愛の詠、杜子美、白樂天に譲らず、尋常の和歌者流を以て論ずべからず。又芝山殿の

榮えよと、子をみる今の、身にしめて、親のめぐみし、昔をぞおもふ。

實に孝子の情有りがたき御詠なり、西洞院殿の火災の御歌と、忠孝の對といふべし。

君ならで、誰にか見せん、梅の花、いろをも香をも、知る人ぞ知る。

世乃中に嬉しさも悲しさも、誰此の歌にこころあるべけれと、南留別志にもしるされたり。少し其のさまはつたなきに似たれども、實にとぞ思ゆる。まことの言の葉うるはしからずとも聞えず。思ふ人のおこせたりけるふみなどの、あまりによくいひかなへて、花やかにをかしきは、心淺くぞおもゆる、。

詩歌風流の道は、無用のものとて道學者よりは忌嫌へども、一向に風流の心なき人は。

諸事切迫にして、温雅の氣なくしてあし、。高貴の人のあやまちありて、直に諫めがたきにも、詩みつくれば、いひがたきことも穏に述べられ、父子の嚴重なる間に、男女戀々のまりなき人情も、和歌に詠ずれば障りなく通ず。また旅中のつれ〴〵なる折にも、一首の詩を賦して旅情を慰し、又憂愁のながき夜にも、和歌を案ずれば袖をうるほすたよりともなる。和漢古今の英雄豪傑、武夫勇士詩歌のあと多し。されば道學を本として、詩歌風流をもかねたるをよしとすべし。

✿　✿　✿

和歌は第一の病は理屈あり、理くつは議論なり、和歌にはあらず、いかで餘情を感ずるにいたらんや。第二の病は引かけたる詞なり、こぬ人をまつとあけ焼くやもしほといひくこがるゝと結びたる、言葉躁がしく、心つまりていやし。男の物をあらそふに似たり。よき歌にかけたる詞はなし。當座などに人によみおくれて、何ともあれ早くよみ出ださんと思ひ、且は大なるよみそんじなきやうにと思ふ時には、引きかくる詞を取りてよむべし、早く出來て、しかも歌の一体を得たるやうに聞ゆるなり、されどもよき歌にはあらずと知るべし。

✿　✿　✿

貫之、躬恒の優劣を人の問ひしに、俊頼、躬恒は及び易からずと答へしとぞ。俊頼眼力なきにあらず、躬恒の

山里は、秋こそことに、わびしけれ、鹿のなくねに、目を覺ましつゝ。

など詠めるは古拙にして力あり、後世の人の及ぶべきにあらず。貫之はむかしも今も。人丸、赤人に次ぎて、和歌の聖ともてはやすとも、後世理屈歌の鼻祖ともいふべき歌多し。

さくらちる、木の下風は、さむからで、空にしられぬ、雪ぞ降りける。

人はいざ、心もしらず、ふるさとは、はなぞむかしの、香に匂ひける。

是等最人口に膾炙したるものなれども、皆理屈よりいづる歌にて、超凡の氣なし。糸によるの歌は、理屈中に餘情ありて、超凡の境に近し。古今集にいかで此の歌を、歌くづとは名ふたてし。

續後撰集西園寺殿の歌に、

かきえて、言の葉もなき、眞葛原、なにを恨みの、野邊のあきかぜ。

自もよみおほせたりと覺え、外よりも秀逸なりともてはやせしは、大かたかゝる歌の風調

なり、誠に言葉と、のひ、一首の姿もいやしからず、さても面白く詠みおほせたる歌なり。春暉も強てよき歌よみ出ださんと深くあんじ入りたる時には、知らずして此境に入ることあり。扨古の真の秀逸といふは、かゝるものかとかへりみるに、

ひさかたの、光り長閑き、春の日に、しづこゝろなく、花のちるらん

由良の戸を、わたる舟人、かぢをたえ、行末しらぬ、こひのみちかな。

結ぶ手の、雫ににごる、山の井の、あかでもひとに、わかれぬるかな。

すみよしの、松をあきかぜ、吹くからに、こゑ打添ふる、沖つしら浪。

大かたは、月をもめでゝ、是ぞこの、つもればひとの、老となるもの。

これらの歌は、初より面白くよみてほまれをとらんと巧みいだしたる、工夫の痕なし、實に超凡の作といふべし。されば真の秀逸は、しひて勤めて得べきものにあらず、修行足り、力およびて、扨其の人の見識たかきによるべし。

（つゞく）

小説

○水仙花

第四枚　のどけき風に戰ぐ花（下）

鐵筆將軍

阿仙親子は汁粉屋にありて、しばし雨の霽るゝを待ちつゝありたりしが、なか〳〵に霽るべき氣色なく、見る〳〵軒端には玉の簾をかけ、庭には曇りなき鏡をも据えたり。或る他の時なりせば、其の軒端より絶間なく玉水の落つるさま、又其の庭の一ツみづうみをなれる景色など、如何にもをかしく見られつべきに、此の時に於ては、唯一にもどかしく、面白からず思ひそれたるも道理なり。三人は頻りに欠伸などしながら、唯茫然として打守り居しが、鄰りの座敷にも同感の人々ありと思しく、左の會話きこえたり。

「アヽ―――どうもあきれた雨だな、何時やむだらう。」

「眞成にこまッたね、マー宜いや、仕方がないからゆッくりしやう。」

「けれども僕は實はいそがしいんだからなア……。一体君はいつでも天文の事に就いて理屈をならべる理學士先生だから、此の雨ぐらゐはやめさせる事が出來さうなものだね。エ、君」

「そりやア如何にも容易い事じや、見たまへ、今に此度やむから。アハヽヽヽ。」

「知れた事さ、今にやむのは極ッて居るワ。ソラ彼方の方に雲切れが出來た。」

「ン、雲切れが出來ちや、僕の力忽ち現はれたりじや、アハヽヽヽ。けれども君、僕は彼處と見ると何時でも涙が出るじや。」

「何故？　大層むづかしい事をいひ出したね。又いつものおのろけ筋でも始まるのじやないか。」

「のろけどころか、實に涙が出るじや。ソレ彼處――不忍池のソレ彼處よ、彼處に二階造の下宿屋があるじやらう。僕が學校へ通ツて居る時分……」

「ン、モー解ツたよ、又下宿屋の姉さんの話だらう、聞きたくもない。」

「決して然らずじや――如何も君は早呑込でどうもならん、坐を端して聞くべき話じやぜ。僕が學校へ通ツて居る時分、ソレアノ直江と同居して……」

「直江？　直江だれ？」

「ソレ直江孝治よ」

阿仙は殊更に耳を欹てたり、ろは道理、直江孝治は阿仙の亡兄なればなり、讀者も既に知れるが如く。阿仙の父母も同じく耳を欹てたり、それも道理……。隣席の客は尚も語をつぎ、

「アノ直江孝治と一年半ほど彼家に同居して居ツたんじやが。實よ直江は惜しいこと

をしちや、勿体ない事をしちや。」

「直江孝治なら僕も知ツて居る、能うく知ツて居る、彼は僕の命の親ざツた。」

「ソー／＼、君は端艇會のとき、水に入ツて直江に救はれちや事があツたツけの。」

「彼の人には命を救はれたるのみならず、他にも大層世話になツた、僕も彼の人の事を思ひ出すと涙が出る。」

「實に宜い男だツたの感心の男だツたの、ろきに彼の學問……。今生居ツちやら文學士中で彼の男に及ぶ者はないじやらう、君も失禮ぢやが或は……　……。」

「それは無論。彼は所謂一を聞て十をさとる宛然たる顔回だツたもの。」

斯く話し来ツて、兩人とも少しく聲くもらせたり。阿仙親子も、思はず眼をくもらせたり。二人の聲、三人の眼、曇り来るとひとしく、空は晴れ渡り来れり。空は晴れ、雨は漸く收まりたれども、曇れる眼より新に降り出したる涙の雨の爲めに、尚ほ歸途に就くを得ず、阿仙親子と隣席の二人も。少暫して其の文學士と思しき人は、其の理學士と思しき人にむかひ、紙巻煙草に火を點けながら、

「君モー雨もやんだ、出かけやうぢやないか。」

「休み序にモー少し休め。それに君にまだ聞きたいことがあるじやテ。」

「何だ。」

「君は全くＷが（細君を略したるなり）必要なのか。」

「必要だから相當の者があッたら……と君に依頼したのだ。實は君、僕が洋行すると老母ばかりを一人殘ッて、淋しからうと思ッてさ。だから、出立前までに是非周旋して欲しいね。」

「ヤア君も隨分無情の男だ、Ｗをして數年間空閨を守らしめんとするのだな。然りと雖も僕敢て力を盡さずんばあらずだ。實は僕も君の依頼だから、已に少しく心當りを穿鑿して見たのだが、ドウモ…………」

と言ひ來りしが、礑と膝をうち、

「君どうぢや、先きの話しの直江孝治の妹は？。」

「直江孝治君の妹があッたのかね。」

「あるなんて、僕は拜見したことがある、所謂楊貴妃跣足、メレー、スチュアルト三舍、將たウビイナスも的の別製ものぢやたしか名は阿仙といッたッけ。」

＊　＊　＊

第五枝　うら、かなる日に綻ろぶ花

八疊の坐敷にハ段通を敷きつめ、一間の床にハ容齋の畫幅をかけ、床際の違棚にハ料紙硯と、一個が西洋人の寫真とを置きて、庭に向ひたる明窓の下に、一脚の唐机と据えたり。其の机の上にハ瑞西製の置時計あり、二三の讀みさしたる洋書あり、又和本あり、彼方にハ無數の新聞、三々五々群を成し、此方にて幾多の雜誌、しだらなく列を爲せり。總じて左までに飾りたてゝあらざれども、見苦しといふ程にもあらず、見苦しからざれども隨分に取散してあり。顧ふに未だ妻なき人の客間を兼ねたる書齋なるべし。然り、前回に於て、相當の者あらむと依賴しつゝありたる——有体にいへバ、第一回に於て阿仙を雪中に救ひたる山口恒太郎の書齋。恒太郎はもと阿仙の通ひつゝありたる女學校の敎諭なりしが、其とる所の敎育の主義、校長敎頭と相合はずとかにて、四五月前に其の職を辭し、閑散に日を送りつゝありたり。然るに同郷の某伯ハ、常に彼が才と識とを愛し「資金は手許より出すべければ、洋行しては如何、我も取調べを依賴したき事多々あり」と頻りに山口に洋行を勸めたり。「諾」と山口は答へたり。是に於てか山口は愈々細君を娶るの止むを得ざるに至りぬ、前回にありしが如く。

「山口君居ッちやか。」

と案内もなしに入り来りたるは、同じく前回にて山口と語りつゝありたる男。姓は瀧澤、名は直。夙に理科大學を卒業して、今ではたしか農商務の技手。其の應對言語より見ても、山口とは水魚の友なるべし。

其時山口は小庭にて水仙を培ひつゝありたりしが、我呼ぶ聲にふりかへり。

「誰だ、瀧澤君か。」

瀧澤は、忽ち庭に臨める椽に仁王だち、山口が手を洗ぬて上り来らんとするを見て、

「マア宜い、其處でも話は出来る、僕も御出勤がけぢやから。」

山口はとう／＼室に上り、蒲團を出し、煙草盆を出し、茶を出し茶菓子をも出したり。瀧澤は片手に葉巻煙草を持ち、片手に茶菓子を取り、之を食ひながら、

「君どうぢや、昨日はなした直江の妹は？。」

不意に話しかけたり。山口は茶を打飲みつゝ笑ッて答へぬ。瀧澤は性急に又、

「極めろ、極めろ、宜いと極めろ。彼女なら實に結構ぢや、君には少し過ぎ……一体僕が……アハヽヽヽ、實に彼の女は敏捷なもんぢや、それに如何にも又温和で、乃ち君が平生主張しちよる婦人に適合しちよる。學問はどうかといへば、僕も直江君の

處で度々其の文章などを見たが、なか／＼ある樣ぢや。手蹟……僕よりうまいよ。」
「君より又下手でどうするものか。アハ、、、、」
「ナニ僕が拙だ。アー僕の惡筆の名もなか／＼高いもんぢやな……マアそれは宜いとして……エーと困つたな、今何處に居るか知らん……麴町邊に居るちふことを風渡聞いたが……ナニ探せば解る。よし／＼。」
獨りで無茶苦茶に極め居るぞおかしき。然れども山口もまた決して意なきにはあらざるべし、何故なら嫌ならいやといふべき筈、さるに一言をだに發せず、誰にこそ／＼とし居るのみ、アー意なきにはあらざるべし。少暫くにしていと靜やかに、
「ナニ僕は彼女の住所ならば知つて居る」。
「エ」。如何にも驚きたる樣子、直に又語を續ぎ
「阿仙の住所を知つちよる？　如何して知つちよる？　鳴かぬ猫は鼠を捕るちうが、成程君はなか／＼驚くべき男ぢや」。
「ナニ君、彼女から僕が學校で教育して居たんだ、名を知らなかつたもんだから、今まで……。それに僕が雪中で救つたソレ……」。
「ヤア奇談奇談、小說にでもありさうな話ぢや、眞成にあの世論を引起した……」。

「さうさ、眞成さ。世論を引起したツて、僕が彼時の事で彼此いふた奴は、ホンの齊東野人に止まり、新聞などでも、唯何れ徳義も知らぬ小新聞位が、無茶苦茶に記たばかりだツた。勿論それも其の筈、僕は唯將に死なんとする者を救ッたばかで、固より潔白……當今の椿事とは全く違ふ、此頃のは實に彼此いはれる丈の事實は充分ある、僕も實を以へば、此樣な椿事が早晩起るだらうと思ツて辭職したのだ。それにしても嘆かはしきは日本人の氣質だナ、兎角輕佻浮薄で、無茶苦茶に雷同、玉石を分つ眼がない。」

「それはさうぢや、犬の譬喩、虎の譬喩、實に日本人、殊に東京人士に適合する。新聞雑誌記者なんぞも、モット氣を高尚に持たにやいかんテ。が、此度の椿事なんぞはそりやー正に議すべき事ぢやに依ツて、ドシ〳〵議すべしぢや、筆を兀にして議すべきぢや。マアそれはさうとして、君早く心を决せにやいかん、住所が解りや尚宜い、直に周旋の勞をとらう。宜いぢやらう? 宜いぢやらうな?」

偖山口は何と答へしか。實に左の如し。 實に左の如し。

「宜しい。」

批評

○長歌改良論辨駁辨

佐々木弘綱

海上胤平が書ける長歌改良論辨駁を見るに、一つとして云破りたる所なく、中にもおかしきは、古事記は天武天皇の敕語を稗田の阿禮の誦習ひたるまゝに記されたること、童子といへども知る所なり。さるに胤平は、須佐之男命の八雲立つの神詠を、奈良朝の歌なるべしといひ、又本文を捨て枝葉の論を程よくいひなし、又屈したる所は馬の耳に念佛いふて詮なしなど書きまぎらしたり。凡人の議論を評せんとならば、天祖都城辨く、萬我比禮などのごとく、本文のみを論ずべきに、批評の法も知らず、又歴史をも知らで、唯人を罵り、讒謗を以て辨駁の基礎とするは笑ふに堪えたり。かゝる文盲人の書きたる物を再論するは無益なれども、辨駁中に長歌改良論にあらず、廢絶論なりと見え、題字並に序文にも其趣見えたれば、是のみを辨ぜんとす。さきに我論じたるは、五七の調の長歌を七五の調に改良し、耳遠き古言を入れず、今の調にてよくわかるやうに詠まほしといへるにて、長歌を廢絶せよといひつるにはあらず、此事は子信綱が、昨年十一月十八日の讀賣新聞に、長歌改良餘論を出したるを見ても見ぬふりに、廢絶と誣ひいへるなりけり。抑おのれ足代弘訓翁の許に留學の時、新井白蛾の聖學自在に、近代國學世に盛なるは、難波の契冲師、英雋高識を以て普く古書を覗ひ、數百年來の暗路を開けり、誠に萬

葉集は此人の餘光をかりて、天下始めて解することを得たり、稲荷の東丸、東武の真淵、繼ぎおこりて益其の精を明せり、百代の大幸と云ふべし、然るに此比俗生萬葉體と稱し、天竺の人の詠みたるかと覺ゆる陀羅尼の如き歌を作る、此弊風世に行れなば、古今三代の正風體は息むに近からん、彼輩いたく源氏は婦女の文なり、男子の文章に用ふべからず、定家、家隆誤れり、取るべからずなど、放言忌憚ることなし、是又國學の一厄といふべし、云々とあり。白蛾は皇學者にあらねど、吾此文に感じて、若き時より古體の短歌を詠まず、長歌も誰にも能くわかる一體を詠出でまほしと思ひつゝ、年經しに、胤平は延喜の帝の古今集を撰ばせ給ふ時、やごとなき分際にもあらぬを撰者にしたまひ、後の世にも歌聖を仰ぐ貫之、躬恒大人を、おほけなくも片羽者なりと逢ふ人毎に罵るに堪えかねて、長歌改良論を書きつるなり。されど五七の調を七五に改良せよといふは、後世に及ぼす大議論なり。故る五七の調の陀羅尼長歌今より盛にならば、胤平が說は立つべく、七五の調のよくわかる長歌、また今樣など今よりさかんにならば、弘綱が說は立つべし。後の人說の善惡は定めてよ。

○皇朝記事文粹の批評を讀むを讀む

二十一峯外史

文明之母の批評は、如何にも愉快なり、如何にも快活なり、又如何にも能く肯綮を穿てり、殊に一種奇拔の筆鋒を以てし、其鋭利なること殆んど當り難し、流石は鐵筆將軍のと……………余は常に感服しつゝありたりき、敬服しつゝありたりき。然るに其皇朝紀事文粋の批評に對し、五溪山人とかいふ人ありて、之が反駁を試みられたり、其は文明之母第八號に掲載しつゝあるを以て、讀者も既に一見せられしことならん。余も實に細かに之を一讀したるが、其反駁の理由の少しも立たざるを見出したり、乃ち聊か茲に其所見を陳ぶるの止むを得ざるに至る。幸に餘白を假すを惜まざれよ

まづ五溪山人は、文明之母記者の

『皇朝紀事粋の例言に「……此書につきて勉めならはゞ、萬のと思ふまゝに綴り得らるべく、はた一きは古き姿に物せむも、平家物語などのふりにならはむも、心の儘なるべし」といはれてありますが、吾人には本書が果して其んなに大なる價値を有して居るものか、何如しても解りません」

といはれしに對して

『一應は左様にも思えれませう、なれども能う考へて御覽じろ、文章は本體さへ出來ましたら、うはつらの姿はどの様にも成るものです、而て見れば例言に云はれて有る事

ハ、無理ならぬ事でも、どうして價値の無いものといはれませうぞ』と駁せられたり。然れども是甚無理なる駁論といふべし。文章の本體さへ出來れば、其表面の姿のどのやうにも爲るべきは、誰しも知る處、殊に山人の高說を煩すに及ばず。而して山人は此の記事文體を讀めば、其本體の出來べくと思惟さるゝにや、是猫鼠を虎豹視するなり、燕雀を鳳鶴視するなり。余は實に此書を讀んで、文章の思ふ儘に出來、平家物語の姿にも出來、一つは古体にも出來べしとは、賣藥の効能書とほゞ思はれざるなり。故に文明之母記者が「吾人には果して左程にまで、本書が大價値を有して居るものなるや、相解らず」といはれたるは、御尤の評。而して價値なしと言はず、丸で價値なしと言はず、誰左程に價値なしと言ふなるべし。次に山人は文明之母記者の、

『吾人の好んで本書を繙きたるは、其註釋にあるのです、註釋さへなければ、原書を讀んだ方が餘程宜しいでせうもの』。

といはれしに對して、

『成程原書に誤字脫字が無いなら其を讀んだ方が宜しいでせうが、本書に引用せられました原書は、二三を除いては誤脫の甚だ多いものでして、讀んでも解らぬ事だらけでせうもの。而て見ると、吾人は矢張充分に校訂の出來てある本書に就いて見るのが、

利方で捷徑です。』

と駁されたり。是れまた無理なる駁論といふべし。若し二三を取除たる原書にして、盡く誤字脱字なからんか、勿論之を讀むに若かず、然れども誤字脱字あるを以て、誤字脱字なく、而も註釋までしてある本書を讀むとせんか、其註釋の隔靴痒きを掻くの感あるを如何せん、註釋にして已に不充分なりとせんか、其誤字脱字を正したる處、果して幾何かある。且つ僅々たる箇處――誤字脱字を正したる僅々たる箇所の爲めに、首尾貫通せざる――一部分のみにして全体の好味を知る能はざる本書を讀むは、果して得策なるべきか。次に又山人は、文明之母記者乃、

『本書の例言には「註釋はすべて見易からんをむねとしたれば……殊に官職物名などの文意にかゝはらぬ所に註せざるがおほし」とあるが、本書の中部はなか〳〵左様でなく、官職物名のみを細々と註釋し、文意にかゝる形容詞だとか、働詞だとかいふ大事なものは、實に註解してありません』

といはれしに對して、

『……有職に關係しました事は……是れ位の註釋が無うても解るものではありません……形容詞、働詞などの註は僅少の標註や傍註ぐらひの事で解る樣には成りませ

んので、此類の事は活語の書に譲つて略せられたのは……あながちに例言に矛盾して居るとは云ひますまい』

と駁されたり。成程一應は御尤なるが如し、然れども更に能く細考せられよ、本書は抑も我邦の古体の有体を知らせんとの目的なるか、或は初學の文範となさんとの目的なるか、記事文の栞てふ題號にても、已に其目的は後者に屬すべきは明かなり。然るに文意に關係なき有職に關したる事、而も例言に「文意に拘はらぬ官職物名などは注せざるが多し」と書しにも拘はらず、是等を細かに注して文意に拘はる大切な動詞、形容詞を注せさるとは何事ぞ。それに和學者の癖として、動詞などいへば大層なる考をなし、唯解りたッたる一語にて濟むべきをも、是は何の部にして、何段の活用中何に屬し、など、如何にも、くどう說き立てらるゝなり。故に傍註や標註にては事足りぬと思ふなるべけれども「いさゝめ」とは「假初」の義なり「いねがく」とは「寐ね難」の略したるなり「いとけなき」とは「幼なき」なり、など、の如くに註せば如何、實にわけもなくして、初學に益すべきと大なるにあらずや（文意を解する上より）

五溪山人の義論は粗ぼ右の三箇條なり、余は淺學なれども少しく所見を異にするあるを以て、敢て虎威を犯して敎を乞ふ。

○文明之母文藝の批評　　柳園主人寄稿

文明之母は誠に優美な雜誌です、其掲載されたる種目、何れも瓦礫は有りませんが、殊に文藝欄内には、常に金玉の歌文が其光を競ふて居ます。今五號以下の歌文の中で、最も面白く感じたのを一二申上ませう。が、若し間違ツた評が有ツたならむ、幾重にもおわびを致します。

第五號では町原氏の黒の歌、佐々木氏の閑居柳の歌、福羽氏の今様、いづれも面白され作でも。鈍の風流士氏の秋之夜延漫筆、是には内田遠湖、鐵筆將軍兩氏の評がありますから、今更主人が蛇足を添えるにも及びますまい。琴條女史の竹取講義婦女子にしてか程の註釋を遊ばすとは、實に敬服の外は有りません、しかし竹取には是迄種々の註釋が有りますから、願はくは紫式部日記、十六夜日記、方丈記(是らにはいまだ完全した注釋がありません、などの中で注釋を爲さツて下さツたならば、讀者の喜も一層だらうと思ひます。且此樣な注釋書は、附錄にして跡で一冊に綴られるやうにしてもらひたいものでも、但これは編輯者へのお願です。

第六號。原田氏の寄歌祝の長歌、五七の調れけるかも體よりは、かやうな七五の調の

方が遥に面白うございます、殊に佐々木翁の履歴を手短かに述べられたのは巧なお手際です。竹屋雅子ぬしが春月「てりもせず」の歌を首尾にのせられたのは實に感心です、西升子ぬしの行詠梅「ありくのどかさは」と餘韻に止められたのは、一字千金の價が有ります。千家氏、本居氏の短歌、さすがはれたうまいもの。

第七號。村上氏の詠史十二首、中でも和氣清麿、清水宗治の歌は感吟、但織田右府の結句「おど知らざりし」は行きつまツたやうで、誠に調がわるいやうです、何とか御再案ありたし。マアチン氏のポエトリー、輕妙とでも評しませう。樂翁公の雨の記、編者の云はれた通りです。

第八號。佐々木光子の近詠十六首、皆こがねの聲、玉のひゞきです、近来女流小說家は續々出ますが、女流歌仙の出ない世の中、猶一層高妙のれ作を願ひます。佐々木信綱氏の遊大宮公園記、雅に過ぎず俗に失せぬ體、かつ「水枝さす」及「ほろ〱と」の歌、實景目に見るやうです。山陰樵夫の不思儀の再會、今少し辭句を練ツて貰いたい、しかしかやうな段落をよくた長歌が世に出るのは喜ばしいです。

終に臨んでモ、一つ申さねばならぬのは、表紙にある「開き見よ」の歌、さすがは佐々木翁、老功だけあツて、いかにも巧によんであります。妄評多罪（にもある[illegible]）是は鐵筆

將軍の筆法にかぶれたのです。

雜録

○寶物取調に就きての所見（接第七號）

川田剛

さて又、大和の法隆寺は、世界に稀なる古刹なりとて、日本人も西洋人も皆稱美致すことなれども、現今の東院、金堂、講堂、寶藏、五重塔、其外諸堂、悉皆古建築のまゝなるが、其内に後世の再建せるものも交りたるが、若し再建のもの交りたれば、孰れが再建にて、孰れが古建築なるか、之を舊史と實地とに參考するに、甚見分け難き處あり。まづ日本紀第二十一巻推古天皇紀に、

九年二月、皇太子興二宮室于斑鳩一。

と見え、太子傳暦にも同樣にあるし、日本紀通證に、法隆寺、舊名は斑鳩寺と見え、推古天皇の時、上宮太子の創建せられしものなれど、日本紀第二十七巻天智天皇紀に、

九年夏四月、壬申、夜半之後、災二法隆寺一、一屋無レ餘、火雨雷震（扶桑略記第四巻、推古天皇十五年丁卯四月卅日夜半、斑鳩寺火災とあるは異説なり）

とあれど、建立の後、七十年を經て悉皆燒失せしなり。斯く燒亡せしと雖も、程なく再建ありしにや、續日本紀第十三巻聖武天皇紀に

天平十年三月丙申、施二山階寺食封一千戸、鵤寺食封二百戸一。

と見え、同書第十七巻孝謙天皇紀に、

天平勝寶元年閏五月癸丑、詔捨二法隆寺絁四百疋、綿一千屯、布八百端、稲一十萬束、墾田地一百町一。

七月乙巳、定二諸寺懇田地一、弘福、法隆、四天皇、崇福、新藥師、建興、下野藥師寺、筑紫觀世音寺、寺別五百町。

と見ゆ、又法隆寺流記資財帳、天平廿年六月十七日連署に、大僧都法師行信の名ありて、東院資財帳には、

大僧都法師位行信、覩二斯荒墟一、流涕感歎、遂以奏二聞公家一、以二去天平十一年歳次己卯夏四月十日一下即令下河内山贈太政大臣敬中造此院上興二行佛法一焉

とあり。行信は法隆寺の別當にして、天平貞觀の間に律師、又律師法務に任ぜられし事も、初例抄に見ゆ。河内山贈太政大臣は、其人不詳れども、藤原不比等、及、二子武智麿房前の三贈太政大臣は、天平十一年より以前に薨去なりたれど、年代を以て之を推すに、左大

臣永手若くハ其弟眞楯なる可し。而して天平、又天平勝寶は、火災後六七十年を經過せり若し此寺既に癈絶しをらんには、封戸を賜ひ、懇田を寄せらるべき謂れ無く、行信大僧都が、東院、即、夢殿等に修理を加へんやうもなし

其後、又、百餘年を經て、再荒圮し、修理を加へしにや、三代實錄第二巻清和天皇紀に、

貞觀元年五月十九日、傳燈大法師位道詮奏言、法隆寺東院、是聖德太子所レ居、堂宇舊存、遺像是在、永祀猶久、破壞日加、請以ニ大和水田七町四段一入ニ彼院一以充下修ニ理堂舍一幷忌日轉念功德料上許之。

と見え、また、東院資財帳に附錄せる道詮の傳に、

粤淸和天皇御宇、道詮和上、見ニ彼上宮壁搆一悲嘆泣血、重勵ニ再興意樂一遂ニ申忠仁公一、益加ニ修履一畢、依レ之大衆擧造ニ行信道詮兩像一、安ニ置上宮北壇一。

ともあり。忠仁公ハ攝政太政大臣良房なり。前文に據るときハ、諸堂の内、東院、即、夢殿ハ往年の火災を免かれ、大破ながらも、太子創立のまゝ、存在せるに似たり。前に引ける日本紀の一屋無レ餘の文ハ、記者が文勢を強く見せんため、實に浮きたる筆と用ゐしか、さなくば、一時烏有となり、間もなく、地位結構寸分違ハず、故の如く再造ありしに由りて、即、其再造のものを指して、太子所レ居堂宇舊存と云へるなるべし。孰れにしても、聖武、孝

譲両帝より以前に、建たる諸堂、大破ながらも、貞觀年中まで、其まゝ存在せしに相違なし

右にて貞觀年中まで、古建築の堂宇存在せしとは、能く分りあるが、貞觀以後、近世に至るまで、再度火災に罹らざりしか、現今の諸堂は、悉く貞觀修理のまゝ、其形を失はざるやと問はゞ、余は之に對へて、火災には罹らざれども、悉其形を失はずとは申難し。諸堂の内、後世建替しもあり、舊材に仍り修理せるもあり、又天平以前の物もありと曰てんのみ何を以て斯く對ふるぞと云ふに、余は今度法隆寺古文書を取調べ、其内より一通の確證を見出せり。其文左の如し、

法隆寺證請

宣旨一通被載應三綱隨官使到着搜索當寺四至内及末寺莊園不日搦進前伊豫守源義顯上事

右件義顯幷從類、可探尋之由御宣下、以今月十九日到来寺家、抑當寺者、上宮太子建立、救世觀音聖跡、佛法最初伽藍、日域精舎興基、積六百餘箇歳之星霜、破壞顛倒無據、纔留所太子拳内御舎利、幷妹子將来妙典安置之精舎許也、全以如然、黨類寄宿之所無之、名體不及於見聞、然間以十九日官使到来、即官使寺家相共、一日同時探搜求畢、雖然一切不見彼姿、雖自今以後若彼黨類見来者、可令搦進其身矣、若虚言申者、太子聖皇、伽藍鎮守、總

而日本六十餘州大小神、冥爵神爵、每寺僧等一一毛孔可罷蒙者僅所請如件

文治二年十二月廿三日

都維那師　唯世

權寺主大法師長曜

寺主大法師　度安

權上座大法師範覺

上座大法師　嚴與

傳燈大法師　賴融

傳燈大法師　林曉

傳燈大法師　禪覺

これは、伊豫守義經が、其兄賴朝と不和になり、京都を去て流浪せしに、賴朝兵士を出し、其行方を搜索する時、法隆寺より指出せるものにて、紙質といひ、筆跡といひ、文體と云ひ、疑ふ所なき古文書なり。是に據て前論の主旨を說明せん爲に、此文句に注解を下さんとも、話頭傍徑に入るべけれど、請ふ。しばらく、これをゆるせ。

三綱とは、僧衆の職名にして、上座と、寺主と、都維那との三者を謂ふ、即、此文の末に權上座範覺、權寺主長曜、都維那唯世とあるは是れなり。

前伊豫守源義顯とは、義經の改名なり。昔は官位ある人など、罪を犯し、之を刑戮せる時には、其名を改むる慣例あり、保元の亂、右馬助平忠政朝敵となり、改名せられしこと、人車記に見え、保元物語第二巻にも、平馬助忠政は、其時の別當花山院中納言たゞまさと同名なりけりなんとて、忠のぞと改名せられてけり、とあり治承年中、高倉宮以仁王、平清盛を亡ぼさんとて、軍を起したまひしに、清盛之を朝敵と申なし、公卿僉議、其名を改められし事、玉海、山槐記、百錬抄等に見え、平家物語第四巻にも、まさしい太上法皇の御子を射奉るだに、あまつさへ、凡人になし奉るぞ淺間しき、源茂光とは此高倉の宮の御事なり、とあるにても知るべし、伊豫守義經も罪人となり、朝議其名を義行と改められしが、身を匿し行方知れざりしかば、或人義行と云ふ文字には、能く行きて逃匿る、意ありと申し、に由り、之を義顯と改む。義顯はよく顯はる、と訓む、ありかを早く露見せしめんとの意なるべし。此事東鑑第六の巻に、

文治二年閏七月十日、義經者與二殿三位中將殿一（良經）爲二同名一改二義行一。

十一月五日、大夫屬入道申云、義行者其訓能行也、能隱之義也、故于レ今不レ獲レ之歟、如レ此事尤可レ思二字訓一云々依レ之猶可レ爲二義經一之由、被レ申二攝家一、とあり。

義顯幷從類可二採尋一之由御宣下云々　とは、東鑑第六巻に、

九月廿九日、北條兵衛尉飛脚參着、申云、去廿二日、糟屋藤太有末、虜堀彌太郎誅戮佐藤兵衛尉者、景光白狀云、豫州此間在南京聖佛得業邊、又景光與豫州使者度々向木工頭範季之許有示合事、云々、仍京都事付左典厩、經奏聞差副五百騎於比企藤内朝宗爲搜求之、遣南都了。

十月十日、去月朝宗等、打入南都、雖搜求聖佛得業邊不獲義行之間、空以歸洛、依之南都物騷、衆徒蜂起、含鬱訴可停止維摩會之由、風聞云々、

十二月十六日、當時比企藤内朝宗以下御家人、差置郎從等於南都、守聖佛得業坊是爲尋義顯也。

とあり。此時義經は南都の邊に潜匿せりとの風聞ありしこと、知るべし

積六百餘歳之星霜とは、文治二年より、推古天皇九年、太子創建の時まで、五百八十五年なるを、六百餘年といへるは、大數を擧げしなり。又天智天皇九年燒失し、其後再建のものとすれば、五百年むかりなれども、斯く云へるは、其創建の時より計へしなるべし。

太子奉內御舍利とは、神皇正統記第三巻に、

癸巳の年、豐日皇子の妃、御子を誕生ず。厩戸皇子ふてましますり。生れ玉ひしより、さまさま奇瑞あり、たゞ人にはましまさず。御手を握り玉ひしが、二歲まで、東方に向て、南

無佛とて、開き玉ひしかば、一の舍利ありき。佛法流布の爲に、權化し玉へることと疑ひなし。佛舍利は、今に大和の法隆寺に崇め奉つる。

と見え、法王事略に、

二年癸巳春二月生、後僅十有二月、其十五日壬午平旦、向レ東合掌、稱二南無佛一、而再拜開レ掌、有二佛舍利一光曜亂轉。とあるは是なり。

妹子將軍妙典とは、小野妹子が支那より持歸りし法華經を謂ふ。扶桑略記第四卷に、

十五年五月太子奏曰、臣之先身、修二行漢土一、所レ持之經、今在二衡山一、望遣二使乎將來一、比二校所レ誤之本一、天皇太奇之、左右依奏、誰令レ使乎、太子遍相二百官之人一奏曰、小野妹子合レ相云々

十六年戊辰四月、遣唐使妹子歸朝、衡山般若臺中所レ納複一巻法華經持來、幷三老僧贈書裏物等、建二于太子一。

とあるは是なり。斯く詮釋して、此古文書の要領を擧ぐるに、左の如し、今度前伊豫守源義顯(即義經)が、法隆寺に潛匿せりとの御疑念にて、官吏御指向に相成たり。本寺六百餘歳を經たる古刹にて、諸堂數多あれども、今は大破傾圮して、太子拳內の舍利と、小野妹子支那より持歸りし法華經とを、納めたる堂のみ殘りて、其外に義顯、並に其黨類を藏し置くほどの建物は御坐なく云々の意なり。

此時もそや、舍利堂と藏經堂の外は、悉皆大破し、義顯等を匿すべき堂宇無と聞ゆれば、現在の伽藍は、太子の舊物に非ずとは雖も、前にも云へるが如く、東院の外は、天平年中の再建にもせよ、其後一度も火災に遇はず、大破ながらも修理を加へ、一千百餘年の今日に至りし事は、貞觀元年、大法師道詮の上奏せ、此文治二年の古文書とにて知らる、なり。

さらば、現今の堂宇は、文治以後、いつ頃修理せしものか、其修理の時、舊制と變更せしか否かと云ふに、彼の有名なる金堂の壁畫は、高麗の僧曇徴の作なりと申傳ふれども、之を正倉院寶庫なる美人の古畫、もと法隆寺所藏、今御物となりたる、阿佐太子の筆蹟に較べ視るときは、精巧に過ぎて古色少し。恐くは奈良の朝以前の物に非ずして、鎌倉開府時代の筆ならんと思はるれば、諸堂修理も亦其頃なるべし。建物の形、幾分か變更せる處ある可れども、煉石の地礎、古朴なる棟梁、多くは舊材を用ゐゐれば、其形もさのみは變更せざりしならん。

右の如く、現在と實地と、日本紀以下の舊史とを參考するに、一千百餘年来の事、悉符合せり。余は佛法信徒に非ず、一寺の興廢に就て喋々と辨論する筈はなけれども、近来世上に、皇國の歴史は實録にあらず、杜撰の書なりと一概に排斥する輩あれば、且は其冤を雪ぎ、且は寶物取調出張の美術範圍の外なる學問上に益ある事を申述べたるなり。

（完）

大日本美術協會に於て、去る一日、同會事務所へ美術家の大家、英人リバーチー氏を招聘して、美術上の演說を聞きたり。當日は同會頭佐野子爵、副會頭九鬼隆一氏を初め、掛員會員等數十名、其他美術學校役員、及び外國人はフエロノサ、ビゲロー、ワクナルの三氏、外二三名の聽聞者にて、此外は筆記者、通辨等なりし。リバーチー氏演說の大意は左の如し。

予は英國に於て、二十年来日本の美術品其他の雜貨を商ひしものにて、素より美術熱心家なり。今度渡来せしは日本國の美術を探求せんが為めにして、今や大に調査探究せし所あり。日本の美術は實に一種固有にして不思議の妙所を備ひ居れり。今は歐米各國到る所として、日本の美術を愛玩せざるなし。併し爾後日本美術家の思想追々に變化し、今は日本固有の美術を放棄するの傾きあり。日本の美術は此有様に過ぎ行かば世界最下等の地位に達すべき事を發見せり（氏は此時自分購求携帯せし品々を卓上に並べ、先づ一つの油繪風の繪畫を示し）此は甚だ見惡き繪なり、元来日本は天然の美術技藝を持ちながら、斯く西洋の油繪を眞似る抔とは、最も不都合の次第ならずや。若し油繪の妙所を練習せんと思はゞ、眞の油繪を練習せざるべからず。即ち現に日本には斯の如き繪畫

原本あり、以て真の美術の度を高める事は容易なり。」とて新撰畫譜一部即ち往古の畫伯探幽雪舟杯の繪畫を縮圖せし者を示さる)當會場の繪畫(現時の青年繪畫共進會の事)を見るに、日本諸畫派固有の筆鋒あり、中々愛すべき繪畫なれども、中には今述べしごとき油繪風のものあり、最も見惡し。此等は宜しく當業家の改良すべき所なり。又日本の家屋は最も便益にして天然の風致あり、然るをワザと西洋マガイの家屋を建築する者益々多きを加ふるは抑も亦た何事ぞや、西洋風の家屋たるや、不便にして其れ建築ヲツクウなるのみならず、美術上の風致更になく、且つ入口窓等にても、日本の引き戸等と異なりて開き戸なり。此開き戸の大なるものに至りては、場所を取りて甚だ不便なり。渡來後殊に感服せしは、宮城の御建築是れなり、これは日本純粹の築造にして之に少しく改良を加へて、椅子テーブル等と配置せられし等は甚だよろしきを感じたり。

また日本婦女の服裝は、目下歐州に於ても、其の婦人適當の衣服なりと賞賛し、大に流行せる程の天然の雅致を有す。然るに却つて窮屈なる西洋服を着するは、最も不似合なりといはざるべからず、偶ま日本婦人西洋服を着するも、其の風采最も下品にして醜し。(毛糸にて編みし机上の涎れ掛を示しつゝ)此の品甚だ見惡し、日本にて箇樣のものを拵へる樣になりしは、最も惡しく思はるゝなり。元來日本は針仕事に於て世界第一の妙を

得たるものあれば、矢張針を以て製作せし從來のもの甚だよろし、日本人の針を用るは、最も奇妙の技藝にして、特に縫取り美術の如きは、最も歐州各國の及ぶ所にあらず、其の縫取りは妙なりとも、唯々彩色の配合方甚だ宜しからず、去りながら日本固有の染糸を用ひ、而して古代の摸樣を縫取るに於ては、此の美術も各國に冠たるに至るべし、

又日本の紙張り日傘は誠に輕く、且つ價も廉にして便益風致の兩つながら兼ぬるものあり婦人の之を翳せる風は、實に天然の美術を含めり、併し經濟の一點に至りては、或は蝙蝠傘の方宜しからんが、先づ是等は格別の害なきも、最初に述べし繪畫幷に縫取り業等に於ては、日本固有の技藝を有し居れり是等は實に改良を用ひずして日本固有の風を研究すべしされば日本が世界第一の美術國となるは余の保證する所なり（郵便報知新聞六月五日紙上）

○餘興　　傍若無人樓主

元來鐵筆將軍の宣言には、洒落も滑稽も可成的間接にやれとの事、されば拙者ごとき者には、所謂痩馬に重荷、唯でさへ怪しいに「ダイレクト」だの「インダイレクト」だのと小むづかしく出られては到底右働も左働もならず、然りとて敵に後を見

せるも殘念と、非常に奮發して、油汗を流して苦涙を揮ッて、書きしもの、矢張うまからず。面白からず然れども多くの洒落の中には、讀者に眼を眩させ、池の端の寶丹の價を上ぐるなど或はなしともいふべからず。又讀者に嘔吐を催さしめ安土町の千金丹をも賣切にさすることもありなん。效能書は此くらゐにして、先に角御評判を願ひまつる、願ひまつる。願ひまつる。

●負けてあげます　或る處に一軒の豆腐屋ありけり。其の主人といふは古今無類の巧言家にて、何事にも世辭を用ゐざることなき程なれば商買物はいふに及ばず。　おくんなさい、お豆腐を。　ソラ三吉や御客樣だよ、負けてあげな。　お豆腐を二挺ください。　ヘイ今日は能いお天氣で……夫れ三吉やお客樣だよ、負けてあげな、能い處を負けてあげな、　斯く頻りにお世辭を並ぶるより、或人不審におもひ不詳きかな御身の話、味噌醬油なんど重量は增さらぬ、豆腐の負樣とは如何のものにや、と問ひければ、主人はぬからぬ顔、ナニお德用の爲めに片端の堅い處を差あげます。

●それでも　親父、朝寢坊の子悴を叱りていふには、　コレ起きんか、モーてんとう樣は高いぞ、ほんとうに貴樣の樣に朝おそくまで寐て居る奴があるものか。　子悴、夜具の袖より首を出し、　それでも夜寢るのは早うございます　讀者、よみをはッて少しく不興な顔、この話は何だか古いやうだ。　作者、筆のかげより首を出し、　それでも前のは新らし

うございます。

●考物　次の考物をお當の御方ハ、文明之母何號でもお望みのを一部呈上いたします。

甲「ドーダイ、貴様ハ憫然な奴だなア、昔ハ神聖動物だなどと威張ッたとて今ハ見る樣ハねいやそれと違ッて己などハコー毎日跳廻ッて居るのだ、昔の金言にも虎ハ死して皮を遺すアー己ハ死して近頃肉を遺すアーそれに貴様の前だが己が居なけりや陸軍ハ暗だぞ。乙「ハゝゝゝ無鳥島の蝙蝠とハ貴様のことだ、己だッてコー縦に見て居りやー一文の價値もないが、倒さまに見て見ろ、ヘン、ドウダイ豪氣なものだらう○此の甲乙の二物ハ何。

寄書

○フォスカー婦人の傳（前號の續き）　陵北女史抄譯

讀み了ツてフォスカーハ、何ものゝ輕薄男子が、思ひも染ぬ戀ひのかけ橋、顧へば四五年以前の事、彼のサレー氏に己が身を寫させたりし其像の、今尚も彼方に殘るやらん、恥しさの限りにこそ。イデ回答を送りやらんと、墨くろ／＼と認むる文面え、

數ならぬ賤が身を、斯程に思ひたまへる段ハ、呉々も辱なう存じそべりし、去りなが

ら婚姻と申すことハ誠に大切のことにて待り、中々輕忽に致され間敷ものにて、唯一片の寫眞に依りて、眞に結婚を望まる、抔とハ、扨如何なる御考へにて候や、且妾事ハ今暫く結婚の念之なくはべれバ、此度の事ハお斷り申上候。假令ひ如何樣富貴利達の道あるとも、之らは妾の望むところには毛頭無レ之、重ねて御申越なき樣願ひあげ候。

これにはスコツトも一驚を喫せしなるべし。フォスカー孃の心の中ハ、實に此の手簡の文言にて明さまに推さる、なり、他事をいふに足らず。

數多の年月を過行く程に、フォスカーハ天才元より優れたるから、其考ふる所多くハ理を得て、彼れボートンが家に在る中、或る一個の農具を發明し、(これハ播種の爲めに便利なる機械にして、其後瑞典は勿論那威地方に行はれ、近時米國に於てもこれを用ゆるに至れり)主人ボートンの爲に益する所ありしのみならず、一身の爲にも大に利せる所ありたり。尚しも怠らず勉強して、近郷のものにも羨まれぬ。

フォスカーの名は嘗に近郷に於てのみにあらず、瑞典の各州にも人々之を唱へざるなし。時しも孃の二十歳の暮れ、ボートンの媒介もて理學者トーマス、ハンベリと結婚すること、はなれり。琴瑟相稱ふて愛情濃かに、それより後は夫を扶けて、只管理學上の事に注目したりき。

トーマス、ハンベリは當時名だ、る理學者なりしが、日夜書院に籠り居て理學的の研究に從事し、兼て著述をなさんとは企てたり。時々旅行して佛京巴里に行くの外ハ、概ね

外面に出ることなし。其後氏は何か郷人と意見を異にし、或は嫉妬を受けたるにや、或夜の事にありけるが、郷人どもは大勢打寄り、各々手に〳〵物提げ、ハンベリが家方へ寄せ来り、日頃の遺恨此時ぞ知れ、と思ひ〳〵に聲振り立て、戸を蹴り放ちて侵入せり。折柄ハンベリは黙坐して書物を開き讀み居けるが、此物音に打驚き、早くもフォスカー婦人に向ひ、裏口指して言ひけるは、我れ正理を唱へて郷人に嫉まる、固より餘儀なき仕合にこそ、今夜此處に打殺さるゝも勿論覺悟の上なりかし。去はあれ、御身は之より出て、早くボートンの内に逃れよ、躊躇ふときは惡かりなん、早く〳〵、と呼び立つれど、フォスカーはビクともせず。妾一たび御身に嫁ぎ、此處に參りし上からは、御身の災は妾の災、など逃るゝを敢てし侍らん、御身と共に命を捨るは、妾の固より望む所、といふ折さへも暴黨原は、そや此坐敷に飛入りけり。此時婦人は夫をかくまひ、口を極めて暴徒を罵り、壁に掛けある主上の肖像手早く取りて彼等に面し、打たば打て殺さば殺せ、と呼ばはりたりしが、彼等は此手に驚きつ、互に顔見合せて皆こそ〳〵と退きける。是フォスカー婦人の頓智によりて、夫の一命を救ひたりと、後乃代までも取沙汰さるゝ、實に有名の事蹟になんある。

フォスカー婦人のハンベリ氏に對する、温和を主として其身を愼み、常々之を勵まして飽くまで之を扶けたり。ハンベリ氏の著書三種あるが、これ概ね婦人の助けに成りたりといへり。就中其理學律(The laws of natural Phylosophy.)の如きは、一に婦人の手に成りたりと云ふ。

一千八百四十年三月、一男子を生む、名をヘッヅドリーといふ。不幸なるかな、トーマス、ハンペリ氏は一千八百四十七年、婦人の三十二歳の時に當りて、肺患に罹り、其年十一月といふ月に、返へらぬ旅路に向ひたり。當時ヘッドリーは年僅に八歳にてありしなり。

偖もフォスカーは既に夫に別れてより、彼以前のフォスカー婦人なりしが、只其一兒のあるを樂み、偶々再緣の所望あるも、斷然これを謝絕して、唯管ヘッドリーの敎育に熱心せり。されはヘッドリーも能く母の意を體して、勉學に餘念なく、益々其成蹟をぞ現はしけるが、其後ヘッドリーが十三歳の秋、父ハンペリの知己あるを幸ひに、佛國巴里に遊學せしめ、專ら法律の研究に從はしめけり。

さる程に母フォスカー婦人は愛兒ヘッドリーに仕送りすべき學資さへ、今はやう〳〵手薄くなりしより、我身も巴里に赴き、自ら主として雜誌と編輯し、彼の有名なる婦人科學雜誌(The Womans Scientific Magazine)を發行し、其れにて得たる金をバヘッドリーに附與し、日に夜に其卒業を待ちにけり。

一千八百六十三年ヘッドリーは法律學修業の功を卒へ、狀師となつて勤めけるが、巴里に在て名を知られ、一時非常の英名を博せり。此時婦人は尚も雜誌の編輯に從事せしが折がなあれはヘッドリーに助言し、法律社會の出來事をら、常々注意深かりし。這はこれ其子を思ふ一念にてありつらん。

今やヘッドリーは世に有名なる狀師となりしかば、婦人は科學雜誌編輯の任を或る知

已に譲り、一時瑞典婦人雑誌とて世に名高かりし雑誌を辭し、一たび故郷に歸らばやと、一千八百六十九年の春がたに、瑞典指して歸りけり間もなく。何か事を取らばやと思案せし甲斐もなく、其年夏秋の交よりして何となう心地あしく、ヘッドリーが歸宅して介抱に餘念なかりしにも拘はらず、五十四年を一期として返らぬ旅路に向ひにき。世と擧ツて悼まぬものとてなかりけり。

孝貞を盡したるが上に、兒童の教育に其身を委ね、剰へ雑誌を發行して、世教に針路を指示し、貧困なる漁夫の一女より起ツて、能く斯の如きに至る、フォスカー婦人の如きもの世間果して幾人かある。世上の婦女これを見て鑑となして可なり。

譯者曰く、右は佛京巴里發行の某雑誌より抄譯したるものなり、但しシャーロットフォスカー婦人の履歴を詳かに述ぶるときは、一部の小冊子としても盡きざるべし、依て此には其重要なる部分のみを拔萃せしものなり。

彙報

○訝かしきかな　國の基に掲載しある論文には、其未完のものは概ね(未完)とあ、(以下次號)とか丁寧に斷りつゝあるなり。其は既完の雑誌に徴して疑ふべからざるなり。然るに獨り能勢氏の論文——有名なる能勢氏の論文に限り、特更に(未完)ともなしてあらざりしに、未完のものとなされしは——未完のものとなして其次ぎをかゝれしは、訝かしきかな、如何にも訝かしきかな、嗚呼如何にも訝かしきかな。

○然れども　といふ文字ハ如何ほども便利極まれる文字にこそ。彼の蘇東坡の范增論の如き、全篇殆んど之を論難し、之を攻撃し、之を貶抑し、而して最後ニ「雖然」の文字を置き、倏焉また一抑す、學者皆其敏妙を稱せざるなし。是其「雖然」なる便利なる文字あるが爲なり。然り而して玆に一篇乃論文を起稿せしと假定めよ、其の論文ニして唯他の笑を招くものゝと假定めよ、是ニ於てか辨難攻撃四もれ起ツて、已れを圍繞せしと假定めよ、此時ニ當ツて前論ハ未だ未完のものなりとて、先づ論者の鋭鋒を避け、而して彼の便利極まれる「然れども」といふ一轉語を置き、更に徐々と説き出して、前論の誤謬を補ひ、先きの攻撃者をして茫然措を失ハしむること、又之無しといふべからず。是に至つて「然れども」の一轉語の便利また極まれりといふべし。

○萬古の妙文――勢能氏の議論　吾人ハ記臆す、先きの東京高等女學校教頭、教諭、兼幹事たるバチエロル、ヲフ、サイエンス能勢榮氏が國のの基第三號に於て、女子ハ自ら操るべき職業の撰擇を爲す必要ハなくれども、已れの婿とすべき男子の職業を撰擇をるハ必要なるヿなりと云ひ、政治家ハ敵あり、暗殺せらるゝヿあるべし、要撃せらるゝヿあるべし。商法家ハ一度失敗ばれむ落膽首を縊るなきにあらぞ。農業家ハ大丈夫なれども田舍與し。工業家ハ危險、或ハ蒸滊機關の破裂するヿあり、礦山の崩壞するヿあり、折々ハ滊車も衝突をべし、滊船も覆沒すべし。醫者ハ急病と呼べば、半夜暖かき寢床を去りて、割愛して出掛けねばならむ。陸海軍人ハ大抵家外に在り、常に空しく孤衾を守る日多し。新聞記者は亂暴なる書生の變体なり、故に時として獄ニ繫がる。然るを以て政治家、商法家、農業家、工藝家、醫者、海陸軍人及び新聞記者ハ、高等の教育を受けたる婦人の相手ニあらぞと、眞向正面ニ論ぜられしを慥かニ記臆す。又全躰婦人ハ文學、圖畫、音樂、等優美なる智識の發達するものなして、武事、政治、法律、工業、商業等の智識とハ緣遠きものなれバ、婦人が職業の苦樂を味ふを得るハ、文學士、理學士ニ限ると明々地に論じ去られしを慥かに記臆す。然り而して此の道理に適ハざる議論が、大ニ世の攻擊を受け、辨難を受く、嗤笑を受けしを慥かニ記臆を。然るに氏ハ前論ハ未完のものなりてふ觸れ出しニて、此度其第四號ふ於て、先づ彼の便利なる「然れども」てふ一轉語を冐頭ニ掲げ、其の又

文學士、理學士の危險を列擧し、其の不安心なるは、矢張工業商業家、海陸軍人、新聞記者など、異なるヿなしと斷言し、更に進んで故に婦人が婿たるもの、職業を撰擇するは無益の事なりと斷案し去られたり。嗚呼氏が勇氣天晴れ感心といふの外、辭の出すべきなし。嗚呼氏が議論、變幻奇矯、古今東西、誰か之に比すべきものあらん。嗚呼氏が文章「然れども」てふ一轉語用ひ得て妙甚し、蘇東坡の范增論又何かあらん、眞に千古の妙文——否萬古の妙文といふべし。

○又然れども　然れども(吾人も用ひ方を覺えたり)吾人また〻變なる心地せざるにあらず、或人曰く、一讀先づ吾々は地位の異なれば斯く迄も……高等女學校教頭、教諭、幹事たる能勢榮氏と、非職の能勢榮氏とは斯くも……違ふものかと呆れたりと言はる、吾人もしか言はざるを得ず。成程氏の議論は名論なり、面白し、然れども(成程便利なる文字)問題にある、サブジエクトなる、教育ある女子が安全なる夫婦併立の生活を遂げんとする男子は、如何なる男子なるか、後の一半の爲めにサツパリ分らなく相成りさり。成程氏の文章は實に万古の妙文なり、波瀾開闔、抑揚頓挫、皆備はる。然れども(益用ひて益便利なるを覺ゆ)餘りに妙文なるが爲めに、其主意の又分らなく相成りさるは遺憾極る。何となれば前一半には、女子は自ら採るべき職業の撰擇を爲す必要はなけれども、已れの婿となすべき男子の職業を撰擇するは必要なりといひ、後一半に於ては、女子が婿たる者の職業を撰擇するは、到底無用の事なりといはれたり。ドウしても其主意相分らず。然れども(其餘りに便利なる爲め多く用ゐざるを得ず)其主意の相分らざる處、是れ名論なる所以なり、妙文なる所以なり、昧者辨ぜず。(か)。

○落膽する勿れ　嗚呼世の理學士文學士、落膽する勿れ、嚮さには能勢氏の爲に非常に稱揚せられき、高等の教育を受けたる婦人に愛せらるゝ者は此種に限ると言はれ、忽ち又ガラリ換つて、是亦甚だ危險なるものなり云々と說破せられぬ。諸君の落膽左こそと思ひ侍れども、決して落膽する勿れ。天氣模樣によりては「然れども」の一轉語にて、又譽めたてらるゝやも計り難し。　又文學士の危險を論ぜられたる一節に「時としては演說を爲し或は又文章を綴りたらんに、其の所論一度衆人の意見に牴觸する時は、四方八方より攻擊を受け、讒謗を蒙り、其れが爲めに無形の財產たる名譽をも毀損せらるゝ事なき

にあらず」とあり。真に然り、然れども文學士たる者落膽する勿れ、其一論文の爲には又雷名天下に轟き、日本に誰々ありと、海の内外に響き渡り、得失ツマリ相償ふを得ん。

○西洋主義とは　女學校一件の風評に對して、能勢氏は諸新聞に一篇の辯明書を與へしが、其の「日本」に與へし文言中に「今度の事件の原因は、小生の論文には非ずして、西洋主義の女子教育が、社會の攻撃を受けて敗北したるものと御推察被下度候。小生の論文は不幸にも攻撃の材料となりたる者に御坐候」とあり嗚呼西洋主義――西洋主義の女子教育とはアノ如きものなるか、吾人は驚く。

○女學雜誌記者へ　申上たき事えべる。吾人は常に同記者の筆鋒の鋭利なるを信ず、議論の活潑嚴正なるを信ず、其鋭利なる筆鋒を以て、其活潑なる議論と寫し出す、焉んぞ火の如くに猛に、花の如くに美事ならざるを得んや。然り而して其尤も美事にして、尤え猛なるは、却つて聲色を厲まさず、鋒鋩と露はさゞる――彼のチビたる六號活字の記事にあり。何となれば暗き幔幕の裏には、必らず一層鋭き利刃の隱るゝあればなり。然れども記者よ、其鋭利なる筆は如何にモジモジしても少しくお謹みあれ、彼の百六十八號に掲げられたる「能勢榮君を送る」の一項の如きは、餘りに甚しからずや。其最尾の「尚くは饗けよ」など、は如何にも鋭に失す。記者にえ定めて惜やあらん、否常人よりは一層多情にてれはさん、さきは少しく不憫に思召さずか、可哀相にはれぬさぬか。

○卑怯では御坐らぬか　教育週報記者は其第十一號ふ於て、次の如くに言ひたり「『何其一個人の論文よりして、種々の世評を受け、甚だ迷惑なり……もとより拙者の與り知る所に非ず……』さりとて蟲の好い申譯、我々とて夫の論文が全く關係せじとは思はねども、又全く之を唯一の原因なりともいふと能はず。御兩處とも潔白の御方に相違なければ、左の原因は必ず他に在ることなるべし。我々の考へにては、其の主義が單一の原因なるべしと思はる。而して御兩處とも其の主義に於ては御同腹なるべしと存ず。さすれば其の責任の在る所は如何、之を一人即ち論文の起草者にのみ負はしく、己れ一人、好い男たらんと欲す、○士にも似合はぬ御振舞、卑怯では御坐らぬか」と、然れども誰氏のことなるや、吾人は知らず、且つ○などを用ひてあれば、尚更に相分らず、何ぞ直言せざる、教育週報記者も卑怯では御坐らぬか。

○女學生專用寄宿舍　府下神田猿樂町の今井某ハ、女學生專用の寄宿舍を設立し、細君と共に之を監督せんとする由、吾人にも一通の趣意書樣のものを送り來れり。吾人ハ元來女生の寄宿舍ハ無用なるを信ずるを以て、賛成など、ハ思ひも寄らず。

○言ふよいやまさる　日本新聞ハ、陸奥全權公使の令閨に關し、去廿一日の紙上に於て左の如くに記したり。吾人ハ一讀して何にも言ハず。

去る事ありとか米國の新聞ハ米國駐劄の我特命全權公使陸奥宗光君の令閨ハ花柳社會に生長せし人にして所謂る藝妓なることを掲けたりしが其後間もなくして何人の投書よりけん同新聞紙上に於て陸奥公使の令閨ハ花柳社會の生長にハ相違なきも元來日本花柳社會の藝妓ハ歐米諸國の所謂藝妓とハ大に其性質を異にするものにして日本の社交上之を賤業視せざるものなることを辨明したりと云ふ西洋の藝妓ハ社交上果して如何なる位地を保つや否や之を知らずと雖も本邦に於ける藝妓の位地ハ社交的の問題漸く進歩したる今日に於てハ逐次世上一般の排斥する所となりしと雖も陸奥氏が結婚の當時即ち日本社交上の問題未だ發達せざりし時に於て藝妓と云へる一部の社會が果して世間より如何なる待遇を受けたりしやと問ハヽ吾輩ハ遺憾ながら排斥されたりと云ふを得ず却て當時の形迹に於て藝妓を迎へて其伉儷となすハ一時上等社會の流行なりしと云ふを得べきが如し果して如此なれバ既往の出來事而も文化の未だ發達せざる時代の出來事を以て大勢の變遷したる今日に之が咎め立てするハ實に不通の言なりと云ハざるべからず然れども外人ハ能く此事情を首肯するの明ありや否や吾輩ハ茲に至て只だ本邦社交的問題の發達の遲緩なりしを惜むのみ。

●學術隨筆 博聞雜誌第四十一號目録●

●論説〇皇朝木版考　山下重氏●寄書〇天下ノ書生ニ告グ　大谷川漁夫●歴史〇伊達政宗ノ南蠻ヲ征セムトセシ説〇佐久間象山ノ勅諭草按〇外交古今ノ沿革●傳記〇箕作博士ノ小傳〇コロネル、オルコット氏ノ略傳●天文〇印度ノ降雨〇動物ヲ以テ晴雨ヲトス●地理〇柏原宮ノ御舊趾〇九陵御確定〇市邊押磐皇子ノ御陵墓〇横須賀鐵道〇無籍村落取調〇印度ノ佛足山(圖入)●人事〇各國醫師ノ統計〇長生不死ノ神法〇拇印ノ不同〇尾ノ有ル小兒●農事〇牛耕ノ利徳〇竹筍ノ叢生〇蕎麥ノ皮ヲ去ル法〇鷄卵ノ偽造●工業〇日光動力機〇電影機〇電氣鐵索〇泳氣鐘ノ起原●商法〇日本及カナダ間ノ貿易〇米價昂低表●諸業〇印魚ヲ使フテ瑇瑁ヲ捕フル法〇北海道土人ノ樂器及ビ唱歌●理化〇新發明ウオーターガス奇世ノ〇彈丸猛烈ナル破裂彈藥●衛生〇牡蛎ノ中毒〇瘧ノ寄生物〇伊豆國小嶋ノバク病●教育〇谷中將ノ女子教育談〇實業講習場〇生徒ノ學田耕耘●貨物〇新製紙原料〇絶大ノ毛網〇小便酒〇馬博士ノ貨幣論●雜事〇九數ノ奇ノ追加〇滊車野火ノ中ヲ通過ス〇犬車〇人ニ似タル動物〇昆蟲ノ多眼〇猛虎令女ヲ斃ス

●廣告數十件

●毎月五日廿日兩回〇一冊八錢〇半年分十二冊金九十錢八ヶ月分十八冊金一圓卅錢〇一年分廿四冊金一圓七十錢〇爲替ハ芝口局〇郵券代用ハ一錢券ニテ一割増

東京橋區弓町十番地
發行所　博聞雜誌社

刺客

鐵筆將軍謙崇

第三回

雪の朝、あばらやも玉の臺、荒たる庭も銀の砂を敷きぬ、そが上に餌さがす小鳥、躍る小狗、又をもしろく又愛らし。常にもなう早う起き出でつ「此頃は花も紅葉も枝になければ」と獨りごち「しばしな、きえぞ松のしら雪」と打ちながむるもの果して幾千人ぞ、など風流士のみ限るまじ。眞に絶景!

此の絶景を眺めんともせず、六疊の室の中、獨り寐の床の上、坐するにもあらず、寢ぬるにもあらず、火もなき火鉢を引き寄せつ、其の緣を握り詰めたる拳の上に、凄愴として額を押宛て居る一人の婦人あり。軈て俄かに喘咳あげて頭を擡げたるを見れば、實に阿蝶なりき。阿蝶は慥に阿蝶なれども、また前日の阿蝶にはあらず。彼の星の如くに愛らしき眼、今は血ばしりて凄く、彼の薔薇のごとくに美しき唇、今は頻りに顫動きてすさまじ、絹に包まれたる紅の如き顏の色も、今は蒼白くして雪を欺き、房々としたる綠の黑髮も、今は散り亂だれて風にゆらめく蓬とも見ん。嗚呼實に前日の阿蝶にはあらざり!

阿蝶は今何ものをか見つめたり、其の瞳の指す所より察するに、一葉の新聞紙、見

つむると久しふして、といきをつきつゝ他と眺めぬ。忽にしてまた眼は早くも新聞紙の上にあり、又嘆息をつきて他を視、又直に新聞紙を凝視む、阿蝶の動作は常に此の如きのみ。其の新聞紙には果して如何なる事の掲載しあるにや、阿蝶は又如何なる記事とながむるにや。尚其の瞳の向ふ處を吟味すれば、實に斯の如きの一項――二號活字を以て現はされたる斯の如きの一項――しかも、其の二號活字に圏點を附したる斯までとき一項、「刺客」!

其の一項の記事は實に左の如くなり!

昨夜十時半頃、刺客あり、林商務大臣の歸宅せるを待設け、其の邸を去る四町ばかりの所にて、大膽にも出刃庖刀を以て雪を蹴て馳せ來る馬車に躍りかゝり、大臣を刺し殺せり。然れども刺客も直に其の場に於て、護衛巡査某氏の爲めに斫り殺されたりといふが、彼れは山口縣の者にて、東山武太郎といひ、某省の屬官なる趣、年齒二十二三にして、身幹五尺に足らぬ少年、平生は至極温厚にして事務に勵み、長官にも至極請よく、同僚にも甚だ敬愛されざるものなりと。偖如何なる恨ありて、此の擧動に及びしか、或は林大臣が商政上の所爲につき怒る所ありしともいひ、或は林大臣が嘗て我邦の大帝に對し、何か不敬の行爲ありしを平生怒りつゝありて、竟に是に及びたるな

りともいふが、如何なるものにや、能く取調べたるの上、再び報ずる所あらん。兎に角昨夜は歷史上に殘さるゝの夜なりし。

嗚呼阿蝶の新聞紙のみ見つるも道理、悽然茫然たるも道理、殆んど前日の阿蝶にあらざるまでに化し去りたるも道理。阿蝶の心中は、

「如何すべきぅ、嗚呼妾は如何すべきか、我が意中の人——否實に未來の良人は、殺されたり！人を殺して殺されたり！人を殺したる大罪を冒して殺されたり！夜昨彼の處にて…………………」

忽ちにして阿蝶の眼には、前囘の末段に記したる修羅場は現はれぬ。火の如くになりたる阿蝶は、不意に水かゝらまさるが如く戰慄したり。

「嗚呼今は未だ、國に在らるゝ良人の母は知られざるべし、其の愛子が人を殺したるの大罪を冒して、殺されたりとは知られざるべし。其の知られたる乃時には如何、其の感情は如何。」

忽ちにして阿蝶の眼には、母の嚮に說きたる東山の老母——六十歳左右の可哀の老母は現はれぬ。阿蝶は思はず流したり、一點の熱涙。

「嗚呼人てふものは解らぬものにぞある、彼の東山——未來の良人が、斯る事を爲さん

とせるの人なりとは夢知らざりし。若しや人間違にてはなかるべきか。」忽ちにして阿蝶の眼には愛らしき東山武之助が現はれぬ。眼眄ゝふ色白く、莞爾笑ひし其の笑顔……。阿蝶は魂飛びたり。忽ちにして又血まぶれたる東山武之助が現はれぬ。顔蒼ざめて齒を切り、額より流るゝ血の香腥ぐさし。阿蝶は膽つぶれたり。急にうつぶしたり。

「若しや人間違にてはあらざるべきか、東山に限り――我が意中の東山に限り……

……如何で彼の如き……」

取るともなしに又新聞をとりたり、頻りに又讀み下したり。

「東山武太郎……東山武之助……武太郎……武之助。」斯く幾度となう繰り返して

「嗚呼名は相違せり、少しく相違せり、如何ありとも人間違、うならず人間違。」

僅かに笑を漏らしぬ、少し勇氣づきたるが如し。然れども頼みに思ふ些々たる名の相違も、忽ち左の多くの疑問の爲に打消されぬ。

「然りと雖も名は少しく異なれるも、其の姓の同じきは如何。山口縣の人とあるは如何。其省の屬官なりとは如何。年齒二十二三にして、身幹五尺に足らぬとは如何。常に温厚にして事務に勵むとは、長官の爲めに愛せられ、同僚の爲めに敬せらるゝとは如

何。實につゆ疑ふべき處とてはなし。加之思へば少しく思當ることなきにあらず、常には己が身を寫眞するなど、は、如何にも賤しみし人なりしが、昨日に限り、自ら其の寫眞をうつし來りて置き去りしは、遺物とも見よと妾に殘せしものなるか。而て立ち去る、時の其の容貌、嗚呼想へば實に惡かりし。　まだある……彼の時計――彼の懷中時計『モー別に入用はないから』と妾に與へられたるは何故ぞ　モー別に……モー別に……嗚呼『モー別に』とは何故ぞ『モー』とは何故ぞ」

哀むべし「阿蝶は彼を想ひ此を懷ふて、愈々心にもなき想像をも引きいだし、いよ〳〵失意の色を加へ、腦いよ〳〵充血し、胸いよ〳〵疼痛し、四肢五體とも麻痺すれども、興奮劑にても服せしが如く、愈々神經鋭く眼冴えまさり、愈々顔蒼く額光りて、身動だもせず、唯僅に無き風に戰ぐ、亂れたる髮毛と、寒からざるに栗く、色なき唇とを見るのみ。

奇、妙、不思議、阿蝶は急に起ちぬ！　何にか行きぬ！　其の擧動の活潑さ！　少時ましてまた歸り來ぬ。其の手に持てるものは何ぞ――其の持來りし小瓶の者は何ぞ其の瓶の張りふだを見れば、(Cocain Lydrochloric) アナ恐ろし、毒藥、塩酸！　忽ちにして其の瓶の栓は拔かれぬ！

※　※　※　※　※

「ほんとに如何したんだらうね、何時も早く起きるんざます。お前の方も掃除は濟んだかい!」

＊　＊　＊　＊　＊

阿蝶の母は何の氣もなく、其の下婢に語りかけたり。

「お孃さんは嚮きお店の方へ入らツしやいましたよ、何か藥瓶をお持になツて直に又お室の方へ……さうでございますとも、疾うにお起きになツたんでせう……モー朝飯の仕度が出来ましたよ。」

「オヤさう、それぢやアお蝶を呼んで来やう。」

と、いひつゝ、母は戸を開きてお蝶の室に入り来りたり。入り来りて愕然、

「ヤア」

と一聲叫びたり。其れ道理、阿蝶は既に死しつゝありたりし! 母は額の汗を拭ひもあへず、其の屍体を抱き起して、

「コレ阿蝶…阿蝶…コレ阿蝶や……」

下婢は驚きて馳せ来れり。馳せ来りて尚驚きたり。母は下婢を見るより早く。

「水…水を…早く醫者を……早く水を……醫者…水……」

下婢にも成程二本の脚あり、然れども一本を水の爲に動かし、一本を醫者の爲に動かすこと叶はず。何れを先にせんと思案せしが、先づ近処より、と大急にて水を運び置き、又大急にて近所の醫者に向ツて馳せたり。母は水を含みしが、傍にある塩酸の瓶を見て、

「アヽこれは塩酸、それでは亞硝酸(Amylium Nitosum)」

流石藥種を鬻ぐだけありて、毒藥の消毒ぐらゐは兼ねて聞及びしものか、塩酸を用ゐしものには、亞硝酸を嗅がしむるに若かずと、直ちに之を持ち來りて之を用ゐたり。神を祈りつゝ、佛を念じつゝ。少時にして奇藥は奇効をあらはしぬ！　阿蝶は息吹きかへしぬ！　母はアーと胸撫でおろす折しも、

「叔母さん、お宅ですか」

といひつゝ、案内もなしに入り來りたるは東山武之助！

「叔母さんお早うございます……オヤ如何なしたんですか」

阿蝶の母は具に之を語れり。東山は驚きたり。然れども阿蝶は追々に宜しき様子、眼を開きたり、四邊を眺めたり、己に視るを得るか、東山を見て少しく笑を含みたり。母も東山も共に安心したり。東山も、といきをついて、

「モー叔母さん、安心ですよ、阿蝶さんも、しツかりなさいよ。」

阿蝶は又笑を含みたり、うなづきたるもの、如し。東山は坐り直りて、

「一体私は晩夕来る積りでしたが……叔母さん、世の中には能く似たものがあるものですネ……東山武太郎といふのがあるんですよ、そこで其男が昨夕林大臣を殺しましたので、丁度私が此家を来る道のことで。道は巡査や憲兵で大混雑、通る者を皆つかまへて丁寧に取調べるのですよ。そんなことで、なか〳〵通りきれませんから、仕方なしに直ぐに家へ戻りました。實に妙ですね、其の東山武太郎といふ男も、矢張山口縣の者ですよ。」

「ヘイ」と、母の驚く中格子戸あけて、「御免なさい。」

と、いふものあり。母は娘の傍を離るゝを能はざるより東山が起ちて出で迎ふれば、（必らず醫師なるべしと思ひつゝ）圖らざりき國許にありし實母。

「オヤお母さん、マア。」

「ン、武之助か、手紙じや二十日頃迄に来やうツていうて置いたが、連の人が急にたつやうになツたから一處に来ました。昨夕おそく横濱へついたから、一晩宿ツて今朝一番滊車で……エ、向ふへ来いツて……參りませう、參りませう。」と、伴はれてお蝶の室へ行きしが、是より後の話は知らず。唯樂しげなる笑聲のみ聞えたり

（團圓）

○唐松操（卜本一冊三百五十五頁定價四十錢 日本橋區大傳馬町二丁目文昌堂發）

鐵筆將軍

文壇の老將南翠外史の著、唐松操、まづ總クロース金字入美本に成る。余に評せよといふ。余爲に貴重の光陰を犧牲にして一讀過しぬ。犧牲を捧げたる文の靈驗は、忽ち有難く總身にしみわたりぬ。然れど初より賞めたてゝ、動めかす著者の鼻を拜むもいやなれば、先づ氣にくはぬ箇條より申上げまいらせん。實に批評家は罪のものよ、後生必ず惡しかりなん――これは著者がさらけだしたる鼻と藏しながらの獨吹とか。

第一に氣に喰はぬは文体（地の文に非ず）間接体（Indirect narrative）乃樣で間接体でなく、直接体（Direct narrative）の樣で、又純然たる直接体にあらず、時としては又一種の臺詞樣のものあり。見られよ

a. 夫れては和女はまだ知らぬか、昔話の妖怪退治、大方誰かの作物語してあらうと眈なして居た俺でさへ、聞て喫驚した程ぢや、アー思ひ出しても慄々する、怖やの〳〵。（第一回は此の体）

b. 武平さん、此のお金は何したのでございますエ。 高木樣からお前さまへ御産の手當に……、アー爾うであった、此の手紙に詳しく書いてござります。（第二回以下多く此の体）

c. 相場外れの聲を出すなエ、證據ばかりを捲上げても口があるから何にもならねへ、可愛さうだが活けちやア置けねへ、手跣へ料理をして遣るから、切れるか切れぬか庖刀の料理、加減を食つて見やアがれ。 何うだ三平、此の進物には覺えが

著者は其の自序に於て、本書の効能の著明なるを說いて曰く「之を公刊せんかな、廣告するゟは及ばずして一萬部を賣盡し、一ヶ月ならずして十萬部を超え、一年ならずして百萬部を賣らん」と。或は然ならん、然れども果して百萬部を賣らバ、其の九十九萬九千九百九十九部は、余の此の評の御蔭と知らるべし。但し是は發行書肆へ向ツて申すこと、南翠外史ゟひそ〳〵。

廣告

〇内務大臣松方伯題辭　〇法學博士バリストル岡村輝彦先生序

〇髙橋健三先生序　〇法學士岡山兼吉先生序

〇田中迪先生

〇川瀬周次先生　合著

市町村議員必携

洋装全壹冊總ク
ロース金文字入
美製本紙數四百
頁定價金六拾錢

本書ハ歐米諸國ノ自治制幷ニ之ニ關スル諸大家ノ名論卓說ヲ參照ノ著ハサレタル者也

〇第壹編ハ自治全体ニ関スル事、即自治ノ起因、定義、組織、集權、分權、自治ノ利益、立憲政体ノ関係等

〇第二編ハ議員ノ資格、之ヲ失フ塲合、辭職、退職、人民トノ関係、撰擧ノ諸權、投票、當選、及訴訟等

〇第三編ハ市町村會ノ本義、開閉會、議事法、議決ノ諸說、吏員ノ関係、市町村組合等

〇第四編ハ市町村ノ財産、市町村稅、公債、各權利義務等ノ議決、吏員ノ選挙、裁決意見提出等

〇第五編ハ内務大藏両大臣、府縣郡參事會ノ監督等

其他右ニ關スル大疑問等苟シクモ自治代議機関ニ関スル事ハ大小網羅シ實ニ自治制御發布後一ノ類似ナキ一大良書ナリ市町村議員吏員ハ勿論市町村住民タル者座右ニ欠ク可カラサルコトハ各先生ノ序文ニ於テモ明カナリ江湖ノ諸君續々御購求アランコトヲ伏テ奉希望候

發行所

東京日本橋區大傳馬町二丁目廿二番地　文昌堂　長嶋恭三郎

仝

埼玉縣北足立郡鴻巣町百十四番地　盛化堂　長嶋爲一郎

特約大賣所

東京日本橋區若松町榊原友吉〇仝區新大坂町小林喜右衛門〇仝區本町四丁目杉本七百丸〇仝區通壹丁目大倉書店〇京橋區南傳馬町一丁目吉川半七〇仝町目黒支店〇神田區表神保町日本書籍會社〇日本橋區蛎屋町林平二郎〇長野縣長野大門町西澤喜太郎〇越後長岡目黒十郎大阪心齊橋通南一丁目松村九兵衛上州高崎田町煥乎堂其他各府縣著名ナル書肆ニ於テ販賣仕候

少年園

毎月二回發行

少年園は天長地久の壽を期して昨年の天長節に生れ出でしに、其後非常の好評を蒙ふり、幸に交を壹萬八千の少年諸君に結び、貴族公子の高堂に上り、同胞幾萬の父母の家、幾千の學校の門に入りて、笑語團欒の燈下に出で、遊戯場裡の樹陰に出で、握手接吻の榮を辱ふするを得たり。是れ實に望外の喜びにして、宜しく何事を以てか此厚情に酬い奉るべきや。夙夜に悚れ且つ感ずる所なり。然れども少年園の諸交友に酬ゆべきもの又他事あるべからず唯愈々愼み、愈々勉め、或は嚴正なる學校課業の香味となり、或は温和なる家庭教育の藥石となり、又或は社會的教育の指南となり、職業的教育の枝折となり、以て諸君を娯ましめ、以て諸君を益せしめんと務むべきのみ。今此に第一號より第十五號までに草稿を寄送せられたる諸大家の姓名を掲げて少年園の懐裡は、醇正なる温良なる少年諸君の益友たることを證せんとす。

天是節の兒歌幷譜、樂みの話　伊澤修二君
孝女白菊の歌　落合直文君
木戶公の逸事　天囚居士　西村時彥君
俳優澤村田之助の話　學海居士　依田百川君
奇才の女子　文學博士　中村正直君
那破翁の幼時　中村秋香君
小花和櫻墩の事を記を　井上十吉君
The Death of Atsumori.
理學を修めんと要る　理學士　富士谷孝雄君
少年諸君に問ふ　饗庭篁村君
紅葉
誰にも有益なる一藝
日本少年の爲すべき事業　志賀重昂君

少年園記者に寄す　德富猪一郎君
日本の春幷譜　紅葉山人　尾崎德太郎君
義虎　文學士　和田垣謙三君
文恭將軍
少年の心における宇宙の變遷幷に危險なる宇宙（バチエロルヲフサイエンス）　文學士　坪内雄藏君
手紙の書き方　能勢榮君
少年園記者に謀る　手島精一君
年中行事の歌　福羽美靜君
現今の少年に望む　文學士　國府寺新作君
鸚鵡瑣談　朝比奈和泉君
簡便寫真法　理學士　盧野敬三郎君
朋友の感化

虞令禮氏の傳　東海散士柴　四朗君
韓非子の後に書す　思軒居士森田文藏君
戰僧新世界の浦島　醫學士森　林太郎君
壯士、青年、少年、　愛鄕學人末無八百吉君

少年園發兌日

每月三日、十八日發兌　六月十八日第十六號發兌

少年園定價並廣告料

定價金五錢。十二冊（半年）金五十五錢、廿四冊（一年）金一圓、府外ハ郵稅一冊ニ付金一錢。爲替向け所本鄕郵便局前金ニアラザレバ發送セズ。
廣告料一行、二十四字詰（金十錢。一段（三十行）金二圓七十錢。一頁（二段）金五圓
少年園第一卷（自第一號至第十二號）合本洋綴　定價金五十錢。逓送料二拾錢。
右製本成る。當分の内御注文に應ずべし。

東京府下北豊島郡上駒込村
山縣悌三郎邸内
少年園

南翠外史著

小説 唐松操

總クロース金字入最上美本定價四十錢郵税十六錢

苟くも目に小説を見るものハ我が文壇の老將ヿ須藤南翠其人あるを記せざるべし南翠先生の文章ハ流麗婉曲ヿして讀む者倦むを覺えず南翠先生の想像ハ富膽強大にして千百盡くるを知らず其の婉麗なる筆を以て其の豐贍なる奇想を描きたるものハ我が「唐松操」とを此書唐松操なる一浪士が妖怪を退治て大いヿ英名を京攝の間ヿ轟かし進んで天下の大法官となり大義高潔の名を得るヿ終ると雖も其間數多の轗軻不遇を寫して剰さず理想と見れバ理想歴史と見れば歴史寓意と見れば寓意其の結構したる所の境遇ハ讀者の境遇ヿ依つて如何ヿとも觀察を下さるべし是れ唐松操が出色の妙地なりと爲す論より證據先づ一本を購ふて繙き給ハヽ書肆の多辨を俟たずして快と呼び奇と叫び妙と稱へらるヽと疑ひなし

發行所 東京日本橋區大傳馬町二丁目二十二番地 文昌堂 長島恭三郎

（遞信省認可）

東洋學會雜誌

六月二十八日發行

第三編第六號目録

會告

發兌定日　毎月一回廿八日

定價　一冊金八錢　府金一錢
六冊前金四十五錢　外金六錢
十二冊前金八十六錢　郵税金十二錢
廿四冊前金一圓六十三錢　郵税金廿四錢

東京京橋區南傳馬町壹丁目拾貳番地
發行所 東洋學會

明治廿二年七月十五日發兌